

---

# 一目惚れ

シロクロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一目惚れ

### 【Nコード】

N0207U

### 【作者名】

シロクロ

### 【あらすじ】

二人の少女は出会った瞬間、震え上がるような衝撃に襲われた。それは一目惚れと言われるものだけど、片方は何故かそれを嫌いなんだと勘違いしてしまった。両思いなのに好きと嫌いの一方通行。それぞれの視点。

嫌い。

「そうなの」

「うん、でねっ」

「っ…」

イライラする。

私は教室の一番後ろの一番端っこの席だから、嫌でも教室全体の様子が目に入る。

視界の端っこで談笑する真面目グループ。その中のリーダー役で、学年トップの成績の彼女は微かに微笑んで友人と話をしている。

それを見ると、イライラする。

別に私は誰かが談笑してる姿を見てイライラする、という訳ではもちろんない。ただあの眼鏡が、真面目が服を着て歩いているような、青井涼子あおいりょうこが、嫌いなのだ。存在が嫌いだ。見ているだけでイライラして不快な気分になる。

どうしてこんなに嫌いなのはわからない。だけど2週間前に彼女が転校してきて、初めて姿を見たその瞬間から、私は彼女が嫌いなのだ。

「ちーちゃんちーちゃん、知ってる？ 青井さん、学年トップだった。凄いよね。いきなりの試験だったのに」

「知ってるよ、凄いよね」

うちの学校は今だに成績上位者の名前を張り出すシステムなので、転校翌日からの中間試験でトップをとった青井涼子は今や一躍有名人だった。

私はだいたいいつも10位くらいで結構できる方だけど、だから一つ順位が下がったことで逆恨みしているわけじゃない。

ただ、本当に自分でもわからないのだけど、彼女を見るだけでイライラして、彼女を前にすると息苦しくなるのだ。だからまだ最初に話したきりろくに会話もしていない。どうしてこんなに嫌いなかわからない。こんなに誰かを嫌うなんて始めてで、どうしていいのかわからなくて困ってしまう。

だから余計に、私は彼女が嫌い、苦しい。

「武川さん」

「…なあに？ 青井さん？」

話しかけられてしまった。

声は上擦ってないだろうか。顔は強張っていないだろうか。

いつもは作り笑いも愛想よくするのも簡単にできるのに、彼女が目の前にいるとできない。自分をコントロールできない。

感情を移さないビー玉みたいな目に威圧されてるような気になる。圧迫感を感じる。苦しい。

どうして誰も何もないみたいに、普通に彼女と話せるのか。こんなに彼女は気持ち悪いのに。

「武川さん、文芸部なんでしょう？ 私、入部しようと思うんだけど」

「え…な、なんで？」

「坂之上さんに頼まれたから。あなたもそうだって聞いたけれど？」

坂之上隆美ちゃんは、私の友人だ。諸事情で文芸部を存続させた彼女は知り合いを幽霊部員としていれるだけでは足りず、暇人な私を門番的に配置させた。私が占領してただだからならしてただけだけど、使う以上は多少掃除とかせざるを得ない。それが彼女の目的だ。

要は良いように使われてるんだけど、一室を好きなように使えるというメリットがあつてむしろ私の方が得をしているので気にしていなかった。

けど彼女はたまに私に暇じゃないかと心配していたので、多分新しくきた青井さんを派遣すれば寂しくないからと勧誘したんだろう。彼女は善人ではあるけど独断的な人だから。

「…何か、入りたい部活はなかったの？」

「特にないわ。だから坂之上さんの話は渡りに船というわけ。何をしてもいいというお話だしね」

「そう、なんだ。じゃあ…案内するからついてきて  
「ええ」

横に並んでついてくる青井さん。ただそこにいるなのに、存在感がハンパない。無意識に彼女と距離をとってしまいそうになるのを何とか堪える。

「武川さん、下の名前は智佳子さん、よね」

どきつとした。下の名前をそのまま呼ばれることが少ない私は彼女に名前を口にされただけで苦しくなる。

「そ、そうだけど？」

嫌悪を悟られないように相槌をうつと彼女は微笑む。「ごまかせたみたいだ。」

「坂之上さんはちーちゃんって呼んでたみたいだけど…私もそう呼んでいいかしら?」

「…もちろん、いいよ。じゃあ私はりょうちゃんって呼ぶね」

名前を呼ぶよりあだ名の方が幾分ましだ。呼ばれるだけならまだしも、私はけして彼女の下の名前なんて口に出せないだろう。そんな単語を口にする苦痛を味わうくらいなら一日中うんこと連呼した方がましなくらいだ。…少し言いすぎた。

「ええ。仲良くしましょう」

「うん、そうだね。よろしく」

ああ、イライラする。

彼女はとても私をイライラさせる。でも彼女が私に何もしていないことは理解している。彼女に非がないことはわかっている。今のところ嫌う要素がないこともわかっている。

だからおかしな態度をとるわけにはいかない。

それでも、どうしても彼女が嫌いだ。生理的に受け付けられない。どうしてか彼女が傍にいと落ち着かない。胸がざわざわするのだ。最悪だ。何とか彼女を文芸部から追い出さないと。私の安息の間が奪われてしまう。

「ここが部室よ。ようこそ、文芸部へ。形だけだけど、部長として歓迎するわ」

「ありがとう。これからお願いするわね」

ドアを開けて振り向きながら言うところりと青井さんは微笑んだ。

その笑顔に何故か鳥肌がたった。目眩までする。直視できなくて視線をそらしながら部室に向き直り、部屋に入った。

「そこに座つて。コーヒー、飲む？」

「あら、お願いしてもいい？」

「インスタントだけどね。ミルクと砂糖は？」

「お願いするわ」

滅多に誰もこないけどたまーに隆美ちゃんたちが来るから初期からある長机二つと折りたたみの椅子が4つは常にある。

棚には隆美ちゃん他幽霊部員たちの私物が結構入ってるけど、本棚やクッションにカーテン、机の上の小物という目につくものはだいたい私のものなので、殆ど私の部屋の風体だ。このコーヒーメーカーも豆も私が用意した。といっても勿論、部費で買ったものなのだけ。

「どうぞ」

用意して渡し……はっ、普通にいれてどうする!?! こういう時の定番は…雑巾絞り……いやいや、それはさすがに。ひど過ぎる。辞めさせる程度の嫌がらせて何をすればいいんだろう。

「ありがとう」

普通に出した。

私がいつも座る席に座る。図らずも青井さん、もとிரಿಯうちゃんの向かいだ。

「りょうちゃんは本好きなの？」

「ええ。人並みには。ちーちゃんは好きなのよね。本棚は殆どあなたのだつて聞いたわよ」

「うん、まあ…気になるのがあるなら、好きに読んでいいから」

言いながら私は読みかけの小説を鞆から出して広げる。これで話しかけてこないだろう。考えよう。

嫌いだからと思うままに嫌がらせをしてみました。私が嫌なやつだ。何故なら私は別段りょうちゃんに嫌なことはされていないのだから。

「好きなことをしていいのよね？」

「う、うん。私はだいたい本を読んでも、寝ててもいいし。好きにしているんだよ」

「そう。じゃあ私は絵を描くわね」

「え…絵？」

「面白いわよ」

「は…ぎゃ、ギャグじゃないつ。じゃなくて、絵を描くのが好きなら美術部に行けばいいじゃない」

「美術部も見てきたけど、凄く和気藹々とした雰囲気だったわ。描いているのも漫画絵ばかりだし…好みじゃないのよ。こっちで好き勝手に描いている方が気楽でいいわ」

な…なに言ってるのかわからない。だいたい、文化系の部活などでほしいそんな気楽なものだろう。人に見られるのが嫌なのだろうか。それとも自分は漫画なんてくだらないものは書かないプロ思考だとも言いたいのか。確かに美術部に一度お邪魔した時、殆ど漫画研だった。

でもそれならそれで幽霊部員でいればいいのに。わざわざ文芸部

の部屋に来なくても……いるだけでいいからとか、隆美ちゃんに頼まれたんだろうなあ。

好きに描ければどこでもいいなら余所でもいいけど、頼まれたからここでいいかなってノリなのか。

「そう……じゃあ、まあ、頑張っ

て  
「ありがと」

スケッチブックを取り出して、鉛筆をいくつか並べて描き出した。鉛筆とはまた、本格的な。シャーペンじゃ駄目なのかな。

りょうちゃんが鉛筆を動かすとサラサラと音がした。紙の上を滑る鉛筆は、撫であうような優しい音で、いらいらする。

どうしてだかわからない。

視線はずして本に視線をおとす。なのに意識が彼女から離れない。カリカリサラサラと鉛筆がたてる音がいやに大きく耳につく。

それ以外に音がない小さな部屋だからか、彼女の吐息まで聞こえてしまう。聞きたくなかないのに。鉛筆の音の合間に、本当に僅かにだけ呼吸によって空気が振動しているのが感じられる。

はっ、と今更気づく。密閉された空間で、私は彼女と同じ空気を吸っている。つまり、私の吐いた気体を彼女は吸い込むし、逆に私も彼女の体に一度入った気体を体にとりこんでいる。

「っ」

立ち上がって窓を開けた。

同じ空気を共有するだなんて真っ平ごめんだ。吐き気がするほど気持ち悪くて息ができなくなる。こんな考えにたどり着いてしまった自分が最悪だ。他の人ならこんな風に考えないのに、彼女を嫌いすぎて神経質になっている。

新鮮な空気を吸って息を吐くとドクドクと、脈が早くなっていたことに気づいた。どうやら私は脈まで反応するほど彼女が嫌いらしい。少し熱さえ感じる。

「どうかしたの？」

「ちょっと…空気の入れ換えを。開けたままでも大丈夫？」

「今日は暖かいから大丈夫よ」

「そう」

顔をあげたりりょうちゃんは直ぐにまた俯いて鉛筆を動かし出す。それを確認してから私はゆっくり改めて席につく。

本を開いて、字を見つめる。

全く、頭に入らない。りょうちゃんの姿は視界にないのに。窓を開けたからグラウンドから声や音がするから、もう彼女がだす音も聞こえないのに。

なのに彼女がそこに、すぐそこにいると、分かっているからなのか、知ってるからなのか、彼女をいないものとして扱えない。彼女の存在を無視できない。

彼女が近くにいると意識すると、熱い。彼女の存在が熱い。彼女の存在が重い。どうしよう。こんな状態ではろくに嫌がらせのアイデアも思い浮かばない。

こうなったらもう本はやめだ。話し掛けて彼女の邪魔をしてやるう。

「っ…な、なに？」

顔をあげて驚いて思わず椅子をひきながら、何とか尋ねる。

りょうちゃんは私を見ていた。いつから？ 私が彼女から必死に

目をそらしていた今まで、ずっと見られてたの？

かーっと熱があがる。倒れてしまいそうだ。やだ。恥ずかしい。何か変なことをしなかっただろうか。私が彼女を大嫌いだと、ばれなかっただろうか。

「いいえ、ただ…ちーちゃんはやっぱりとても可愛らしい人だな、  
と思っ  
て」

「なっ  
」

なにを

「初めて会った時から、私、あなたのこと好きよ」  
「…っ…」

なん、なに、これ。意味、わかんない。だって、え？

混乱する私に彼女はにっこりと、花が咲くように柔らかかに、艶やかに、微笑んだ。

それを見て、私はもう我慢ができなくなった。あまりに眩しくて目がくらむ。彼女を見ていられない。

彼女が私を見ているという事実が私の心臓を加速させて痛い。息もできなくて苦しい。

そこにいるだけなのに、緊張で震えそうだ。声が裏返る。嫌いだ。嫌い。嫌い嫌い嫌い。

私は彼女がいるだけで苦しい。体が彼女を拒否してるんだ。だから私はつまり彼女が嫌いなんだ。大嫌い。

「っ…ばっ…馬鹿じゃないのっ」

だから、嬉しいと思ったのは気のせいだ。言われた瞬間、一気に辛く苦しくなったのに、これが嬉しいという感情なわけがない。

私は部屋を飛び出した。

苦しい。息ができない。目眩がしてくらくらして、頭まで痛い気がする。

彼女の戯れの一言がこんなに苦しいのは、私が彼女を嫌いだからだ。そうじゃなきゃ理由がつかない。

初めて目が会った瞬間から、彼女が目について、存在が気になって、仕方がない。こんな風になるのは彼女がうざくて、生理的に受け付けられなくて、死ぬほど嫌いだからだ。

視界に入るだけでうざくて、笑ってるとムカついて、近寄られると気持ち悪い。そう思うのに、どうして私はそう彼女に言わなかったんだろう。

絶対に私は彼女が嫌いなはずなのに、さっきまで気持ち悪くて堪らなくて、今だって彼女と離れたくて、彼女と関わりたくななんてないのに、どうして、今も彼女のことを考えるんだろう。

「っ…最悪っ」

彼女は特別なことは何もしてない。なのに嫌いだ。傍にいと鳥肌がたつて仕方がない。気持ち悪い。存在を抹消したい。

なのに、彼女のことばかり考えてしまう。

気持ち悪い。自分の存在すら気持ち悪い。自分のことすら理解できない。

「っ」

何故か唐突に涙が出た。

彼女に会うまでこんなことはなかったのに。彼女だけが私を苦しめる。

ああ、もう、世界が爆発してしまえばいいのに。全部、この苦しみごとなくなればいいのに。

好き。

「ねえ」

「はい？」

振り向いた彼女、その目を見た瞬間、私は雷に打たれた。もちろん比喩表現だけれど、実際にそうなんじゃないかというくらい衝撃的だった。

名前も知らない彼女はピカピカと光り輝いていて神様みたいに見えた。

つまり、わかりやすく言えば、私は恋に落ちたのだ。一目惚れ、なんて信じてはいなかった。だけど今はもう一目惚れ以外は恋でないと思える。

それほどに彼女が好きだった。心臓が常に爆発しているみたいになるさくて、彼女の眩しさに目眩がして、彼女と対面しているという緊張で手足が震える。

「…な、なんですか？」

彼女は顔を真っ赤にしながら視線をそらしてそう言った。

確信する。彼女も今、私に恋に落ちたに違いない。

「私、転校してきたのだけど」

声が裏返らないように慎重に、彼女に好印象を与えるように微笑みながら答える。ちらりと彼女が手をやる靴箱を見ると『武川』とあった。彼女の名前だ。

「武川さん、職員室がどこか教えてくれないかしら」

珍しくもない、以前にも口にしたことのある名字だったのに、武川、と発音するだけで私の体は熱くなる。

彼女の名前を呼ぶのはまるで彼女に触れる行為と同じようにさえ感じられた。

「え…あ…職員室なら、あっちから出て、左に行けばあります。それじゃあ…」

「あ…」

私が興奮し感動に身を委ねていると彼女は靴をはきかえるとあっさり私の前から立ち去ってしまった。

あれだけ赤い顔で動揺を隠さない様子だ、彼女も私を好きなのは私の自惚れや思い込みではないだろう。なのにどうしてつれないのか。

「……ああ」

少し考えて、すぐに分かった。きっと彼女は照れているのだ。恐らく恋に不慣れなのだろう。私もまたこれほど、いつそ死にそうなほど強烈な恋愛感情は初めてだ。彼女は戸惑っているのだ。なんて、可愛らしいのだろう。

「武川さん…か」

口の中で転がすようにもう一度名前を口にした。それだけでドキドキは再加速して苦しいほどで、幸せな気持ちになる。一緒にクラスになれば、嬉しいのだけだ。

同じクラスだった。教室に入り見回して彼女を見つけた瞬間叫びだしそうだったけれど、口の端を吊り上げるだけで我慢する。

私と目があつた武川さんははつとしたように露骨に私から視線を顔ごとそらし、頬杖をつけて窓の外を見た。

そんな態度、普通なら嫌われてると思つても仕方ないかもしれないけれど、目が合つた途端に真っ赤になつた彼女の表情はいかにも恋する乙女としかいいようのないもので、私は破顔する。

ニヤケそうだ。というか、ニヤケる。なんて可愛らしい。

「青井涼子です」

自己紹介をしながら思いつきり武川さんを凝視する。ちらちらとこちらを見てくるのでその度に微笑んでみせた。というか見られる度にニヤケずにはいられないのだが。

私の態度を新たなクラスメートたちは訝しんでいるが、そんなことはどうでもいい。転校において友人が出来るかの不安は実はあつたのだが、もう一人も友達ができなくても構わないから、とにかく武川さんと親しくなりたい！ ひいては恋人になりたい！

席は私の名字が『あ』からで目が悪いからという理由で一番前に用意されていた。ガツデム。彼女は一番後ろの端なので教室において最も距離がある。

前から思うのだけど、視力がよくないからと言って席を前にする必要はない。何故なら視力が悪ければ悪いほど眼鏡やコンタクトの

視力強制必須なのだから、結果として裸眼で視力1.0より眼鏡をかけて1.5の私の方がよっぽどよく物が見えるというものだ。だから一番後ろにして欲しい。

と、密かに先生に伝えたのだけど何故か冷汗をかきながら先生は私をスルーした。

「むっ」

不満だ。まあ仕方ない。ここから私は彼女へアピールして行く。

声をかけようと近寄る段階で避けられた。逃げられた。距離をとられた。

顔を真っ赤にして眉を逆立てて口をつぐむ姿はまるで怒っているみたいに見えるけど、視線をそらして、それでもこちらを見てくる。私が近寄ろうとも、距離があるまま余所を見ていようと、彼女は私をちらちらリズムに合わせて私を見ている。

どう見ても私に気がある。とても気持ちいい。彼女の視線を感じるだけで達してしまいそうだ。性的な意味で。

私が転入し、すぐに中間試験だった。それは聞いていたし前の学校の成績もあるので免除してもいいと言われていたけれど、テストのレベルを見るためだが受けると言っておいてよかった。

「ここで私がよい点数をとれば彼女は私に惚れ直すだろう。うんうん。」

というわけで、私は生まれて初めて一夜漬けまでした結果、一番だった。前の学校の方が進んでいたとは言え、最高が6位だった私は個人的にも1位は嬉しいし、何より彼女へのパフォーマンスとして最高だ。

「ちーちゃん」

隣の席の友人に相槌をうちながら武川さんに話かける坂之上さんの様子を伺う。

武川さんに逃げられた私を見て声をかけてくれた彼女だけど、どうやら私に味方してくれるらしい。武川さんの一番の友達らしい彼女を少し妬んでいたがそんな過去はもはやないも同然。いまや私の親友だ。

テストも終わり、家のごたごたも落ち着いていた。遠回しな魅力アピールが済んだ今、私がすべきは直接接触によるアピールだ。

…駄目だ。武川さんに関して考えていると接触という単語だけで興奮してくる。相手も私が好きとはいえ最初から下心満載で引かせることがはない。落ち着け、私。

武川さんが教室を出た。

「ごめんなさい。そろそろ…」

「武川さんだね、頑張ってたね」

驚いた。まさか知られているとは。……というか、よく見れば回りの視線が生暖かい。武川さんしか目に入ってなかったがどうやら

そうとうわかりやすかったらしい。

「ありがとう、じゃあまた、明日」

気恥ずかしく思いつつ、私は坂之上さんに言われた通り武川さんと同じ部活に所属すべく彼女の後を追いかけた。

「武川さん」

「…なあに？ 青井さん？」

声をかけると振り向いた武川さんは私を見た瞬間に顔を赤くし、上擦った声をあげた。

声をかけただけでこんなにも動揺するほど彼女は私が好きなのだ。さすがに少し照れるけれど、私も彼女の声が聞けただけで嬉しくなるくらいには彼女が大好きなのでどっこいだろう。

「武川さん、文芸部なんでしょう？ 私、入部しようと思うんだけど」

「え…な、なんで？」

「坂之上さんに頼まれたから。あなたもそうだって聞いたけれど？」

用意していた言葉を口にするだけに緊張した。武川さん、と家で何度も言葉にしたのに全く効果はなかった。喉がかわく。

「何か、入りたい部活はなかったの？」

嫌そうに言う武川さんに少し笑ってしまう。彼女は私への好意を隠しているつもりだろうか。あまりに逆効果だ。彼女の態度では私のことが大好きか、はたまた嫌いかにしか見えない。とてもじゃないけど平静を装えていない。

素直な子なのだなあ。素敵だ。性格の曲がってる私にはますます魅力的だ。

「特にないわ。だから坂之上さんの話は渡りに船というわけ。何をしてもいいというお話だしね」

「そう、なんだ。じゃあ…案内するからついてきて」

「ええ」

横に並んで歩き出す。隣に彼女がいる。それだけで息があがりそうなのを堪える。

「武川さん、下の名前は智佳子さん、よね」

「そ、そうだけど？」

智佳子さんと呼んでもいいか、と計画していたけどやめることにする。だって今、確認のための問い掛けに口にしただけで心臓が爆発した。

今からこんな調子では死んでしまう。私は路線変更をしてあだ名で呼ぶことにした。急いで事をし損じるとも言う。一足飛びに行くことはない。

「じゃあ私はりょうちゃんって呼ぶね」

りょうちゃん、ですって？

呼ばれた瞬間鼻血が出そうだったのは気合いでカバーする。

「ええ。仲良くしましょう」

「うん、そうだね。よろしく」

りょうちゃん？ りょうちゃん！！ なにそれ！ そんな呼び方

されたの初めて！！　いい！！　まるで恋人みたいじゃない！！  
『ちーちゃん』は他の子にも呼ばれてるけど私のその呼び方は彼女  
だけだ。もう決めた。私は生涯彼女にだけあだ名を許す。

「ここが部室よ。ようこそ、文芸部へ。形だけだけど、部長として  
歓迎するわ」

「ありがとう。これからお願いするわね」

ニヤニヤしてると部室に着いた。

小さいけれど二人で過ごすには十分だ。むしろ距離をとらずにすむ  
からよし。

「そこに座って」

入って席につくとコーヒーをいれてくれた。

「ありがとう」

武川…もといちーちゃんは私の向かいだ。もちろんそうなるように  
座ったけれど。クッションがあるので彼女の席はすぐにわかった。

「りょうちゃんは本好きなの？」

「ええ。人並みには。ちーちゃんは好きなのよね。本棚は殆どあな  
たのだって聞いたわよ」

「うん、まあ…気になるのがあんなら、好きに読んでいいから」

ちーちゃんから話し掛けられたことに興奮していると、ちーちゃ  
んは読みかけの小説を鞆から出して読みだした。いきなりくつろぎ  
だすとは、私に気をつかわせないためね。

「好きなことをしているのよね？」

「う、うん。私はだいたい本を読んでも、寝ててもいいし。好きにしているんだよ」

「そう。じゃあ私は絵を描くわね」

「え…絵？」

「面白くないわよ」

「は…ぎゃ、ギャグじゃないつ。じゃなくて、絵を描くのが好きなら美術部に行けばいいじゃない」

「美術部も見てきたけど、凄く和気藹々とした雰囲気だったわ。描いているのも漫画絵ばかりだし…好みじゃないのよ。こっちで好き勝手に描いている方が気楽でいいわ」

本当は美術部なんて見て来ていないけれど前の学校がそうだったからそう言った。前は漫画を書いている子ばかりの中で一人風景画とか書いていたから、今回も最初はそのつもりだったけど、彼女と出会ったからには全く別だ。彼女の裸婦画とか描きたい気分だ。人物は描いたことないけど。

と、この言い方だとまるで漫画を侮辱してるように聞こえなかったかしら。私、漫画は描かないけど読むのは超好きなのだけ。漫画絵は下手くそだからあまり好みではなくて私は浮くのだけと言いたかったのだけど。ああ、もちろん好きと言っても武川さんよりは下だけ。

「そう…じゃあ、まあ、頑張つて」

「ありがとう」

スケッチブックを取り出して、鉛筆をいくつか並べてとりあえず武川さんを、と言いたいけどこの距離ではどうやっても見ては気づかれる。仕方ないから昔からよく描くペットの猫を描き出す。

ちらちらとこつちを見ているのが気配でわかる。彼女との距離は1メートル強。互いに足を伸ばせばぶつかる距離だ。見なくても何をしているかくらい手にとるようにわかる。

もつと見て、と言いたいくらいだ。ちーちゃんのせいで私の新たな性癖が開花しそうだった。とりあえず気づいていませんよーとアピールするために絵を描き進める。

「っ」

突撃、ちーちゃんが立ち上がって窓を開けた。どうかしたのだから。顔をあげるとさっきよりさらに赤い横顔が見えた。林檎みたいで愛くるしい。

「どうかしたの？」

「ちよつと…：空気の入れ換えを。開けたままでも大丈夫？」

「今日は暖かいから大丈夫よ」

「そっ」

私がまたスケッチブックに顔を落とすとまたちーちゃんは席についた。顔をあげるとちーちゃんは本を睨みつけるように見ていた。

思い切って正面から見つめる。

伏せられた睫毛が長く影を落とし、ふっくらほっぺの愛らしい彼女を大人びて見せる。くるくるとした、坂之上さんいわく天パの柔らかなような髪が風にかすかに揺れている。

いいなあ、風。彼女に触れて。あ！ 凄いことに気づいた。風といわず空気なら彼女に触れるどころか全身じゃない！ しかもちーちゃんは呼吸して肺に吸い込まれるし最高じゃない！ ああ、今凄く空気になりたい。こんな風に思うのは初めて。ちーちゃん、罪な人

また新たな境地にたどり着いてしまった。

「っ…な、なに？」

と、見とれているとちーちゃんが顔をあげて驚いて引いていた。物理的にもひかれてしまった。早くフォローしなくては！

「いいえ、ただ…ちーちゃんはやっぱりとても可愛らしい人だな、  
と思つて」

「なっ」

「初めて会つた時から、私、あなたのこと好きよ」

「…っ…」

と、勢いで告白してしまった。せめて放課後にいうべきだったのに。

「っ…ばっ…馬鹿じゃないのっ」

ちーちゃんは勢いよく部屋を飛び出してしまった。勢いよすぎて椅子は倒れてクッションも落ちた。

「…失敗したわね」

片付けながらため息をつく。

彼女のことを好きすぎて、自制がきかなくなっている。あんなムードも何もない告白、怒られても仕方ない。

しかし、馬鹿じゃないのか。中々キツイ言葉だ。もしかして彼女はツンデレなのだろうか。

『べ、別にりょうちゃんのこと好きなんかじゃないんだからね！』

うーん、ありだ。想像の中で勝手にロングヘアのツインテールにしたが、いい。今のボブも可愛いけど。ちょっとたれ目がちなのに強気キャラというのもいい。

ちーちゃんになら罵られてもいい。他の人なら迷わずグーパンするところだけど、ちーちゃんが言うなら靴を舐めてもいい。…ちーちゃんの靴か。やっぱり、どうせなら素足の方がいいから。

命令した癖にくすぐったくて感じて真っ赤になったちーちゃんの小さな足を固定して……いけないいけない。下心は隠すのだった。

「やて」

とりあえず二人分の鞆を持って部屋には鍵をかけた。そろそろ迎えに行こう。

え？ 鞆を持つのは何故かって？ もちろん、入れ違いで帰られたら困るからよ。

大嫌い。

「ちーちゃん！」

「っ」

りょうちゃんと顔を合わすと気まずいので帰るまで屋上で時間を潰していたのに、りょうちゃんは私の鞆も持って追いかけてきてしまったらしい。息もあがっている。

走って、私を探してくれたのだ。そう思うと胸がしめつけられた。友好的に接してくれたりょうちゃんに私は手酷い仕打ちをした。

いくら彼女のことを嫌い過ぎて苦しいのだと言っても言い訳だ。初対面で可愛いだの好きだのとリップサービスをする彼女に対してあまりに私の態度は有り得ないレベルに酷かった。

屋上のベンチで落ち着いて考えた私は、反省して明日にはちゃんと謝ろうと決めていた。なのにどうして追いかけてくるんだ。まだ、心の準備ができていないのに。

「りょうちゃん…あの、その…」

「ごめんなさい」

「…え？」

「突然空気も読まず、無駄なことを言っつて、ごめんなさい。私、少しKYなところがあるから…。まだ、怒っている？」

ずるい。ただでさえ私が悪いのに、そんな風に言われたら…私は、

「私…こそ。ごめん。酷いこと、言った。ごめん」

謝るしかない。私が悪いのはわかってる。わかってるのに、私は

…やっぱり彼女を直視できない。彼女を真っ直ぐに見て誠実に謝罪したいのに、彼女を見ると胸が熱くて苦しくて、できない。

「いえ、いいのよ。隣、いいかしら。少し話さない？」  
「…ん」

私はそつと座る位置をズラした。りょうちゃんが隣に座る。半人分だけ空けた、お友達の距離感で座られた。

会ったばかり、とはいえフレンドリーな人なら特におかしくない、私に好意的な彼女ならなおさら、違和感のない距離感だ。

なのに、彼女が近寄ってきただけで私は緊張した。全身の筋肉が強張って心臓が高なり、体が震えて発汗まで始まった。

他の人相手ならこうはならないのに。自分で自分が腹立たしい。何の罪もない善人そうな彼女を意味もなく嫌う自分が、嫌だ。どうしてこうなってしまったんだろう。

「ねえ、ちーちゃん」

「なに？」

「さつきはあなたを怒らせてしまったし、こんなことを言っただけであなたの気分を害さないか不安なのだけど…」

「な、なに？ 怒らないから言っつてよ」

例え怒ったとして今度は絶対表に出さないと心に誓いながら、私は彼女の言葉を待った。りょうちゃんは少し言い淀んでから私を真っ直ぐに見た。

反射的に顔をそらしたくなっただけ、逆に目を見開いてりょうちゃんを見つめることで堪えた。

「さっきの…あなたが好きと言ったのは本当よ。私はあなたと仲良くなりたいわ。あなたは、私をどう思っているの？」

「っ…」

どうして彼女が私に固執しているのかわからないけれど、りょうちゃんは私と友達になりたいらしい。

真摯にハツキリ言葉にしてそう言ってくれる彼女に、偽の笑顔やおためごかしでごまかすことはあまりに不誠実だ。

だから私も、怒らせたり嫌われることを覚悟して、正直な気持ちを伝えよう。

「りょうちゃん…私は、あなたが、嫌いなもの」

「…え」

「もちろん、あなたが何をしたって訳じゃないよ。りょうちゃんは、素敵な人だと思う。でも…どうしてかわからないけど、初めてりょうちゃんを見た瞬間から、苦しくて鳥肌がたつくらい、あなたが嫌いなもの」

「……苦しくて鳥肌がたつ、ね」

「ごめんなさい。どこがどう嫌いとは言えないんだけど…あなたを見るとイライラしたり息苦しくなったりして落ち着かなくて、生理的に駄目なの」

こうして改めて言葉にすると、やはり酷い。全く理論的じゃない。りょうちゃんに悪いところはないんだから、言い掛かりや八つ当たりみたいなものだ。

「…いくつか、聞いてもいいかしら」

「どっぞ」

「見るだけで苦しいとか…それって、世間一般的に、恋って言わなにかしら？」

「…はいや、何言ってるの？」

確かに私もあまりにりょうちゃんのことばかり考えたりして気になるのでその可能性を一度考えた。でも最初に会った時からだし、そもそも私たちは女同士なのだから、そんな訳がない。

「私たち、女同士じゃない。有り得ないわ」

「…そ、そうね。つまりちーちゃんは、最初に目が合った瞬間から私が嫌いなものね」

「…ごめん」

「謝らなくてもいいわ。それより、私のどこがどう嫌いか教えてもらっていい？」

「え」

き、聞く？ そこを詳しく聞いてしまわれるのですか？

「だってほら、私のどこが嫌われやすいのかとか、聞いておけば今後の人生でも役に立つと思わない？」

前向き過ぎる。にこにこ笑顔で自分のどこが嫌いかなんて、普通聞けない。相変わらず彼女を前にするだけで気持ち悪いくらいの緊張がするけど、少し尊敬した。

「…そう、だね。どこ…というか、例えば今日、放課後まであなたと目も合わさなかったけど、あなたの姿が視界にあるだけで目についてうつとうしくて、あなたがニコニコ他の人と話しているとイライラして、だからって近づかれると嫌悪で身体が緊張して強張るし、変な汗もでるし…とにかくりょうちゃんが側にいると気持ち悪いの」

「……」

「あ、ごめん。気を悪くした…よね、てか、当たり前か。ごめんなさい。でも本物に、今もだけどりょうちゃんといると何だか苦しくて。真っ正面から顔を見ると気が遠くなるレベルでりょうちゃんが

嫌いな。…そういうことだから、友達になるのは諦めて。ごめんね」

「あ…いや、待って、結論を出すのはまだ早いわよ」

「え？」

まだこれでも足りないのか。りょうちゃんつてもしかしてDM？

「今のを聞くに、あなた私の内面は何も知らないまま嫌いなんじゃないかしら？」

「まあ…」

嫌いだから関わりたくなくて、距離をおいていたし当然、りょうちゃんのことはよく知らない。

「じゃあこれから私の内面を知れば嫌いでなくなるかも知れないじゃない」

「それは…そうかも知れないけど、でもただでさえ苦しいのに」

「そんなに私が嫌いなら、友達にならなくても苦しいなら、いつも友達になっってお互いを知れば苦しくなくなるかも知れないわ。食わず嫌いはよくないわ。そうしましょう。しばらくは友達（仮）という事でいいかしら」

言いたいことはわかる。確かに、ただのクラスメートという以外に何の接点もない今もこんなにりょうちゃんが嫌いでも彼女の事を考えて苦しい。それなら多少無理矢理で我慢しても一緒にいて、苦しみを緩和されるならその方がいい。

「でも…」

彼女の言うには穴がある。今の話は内面をちゃんと知れば今ほど

嫌いにならないことが前提だ。でも、今こうして話をして少しだけ彼女のことを知って、すでに朝より苦しくなってる。

だからそんなの絶対無理。私が彼女を嫌いじゃなくなるなんて有り得ないって確信できる。

「駄目かしら。ねえ、私にあなたと仲良しになるチャンスを頂戴な」  
「っ……」

顔を寄せて、見つめられて、真っ正面から彼女の瞳を強制的に見せられた。

少し色素の薄い、茶色の目。綺麗な白目に浮かぶ黒目部分が真っ直ぐに私に向けられてる。

彼女の瞳はきらきらと輝いていて、つやつやしていて何だか触りたくなるような、でも触ることは許されないような、そんな神秘的な美しさを持っていた。

「……」

「っ……えっ、な、なに？」

「あっ……ごめっ、ごめんっ」

思わず触ろうとしてしまった。当たり前だけど眼球は触るものではないしそんなことをされたら痛くて堪らないだろう。彼女は目を閉じて私の指を防いだ。

指先が彼女の瞼に触れてから私ははっとして手を下ろした。

「えっと……返事はYes、ということでもいいのかしら？」

「……うん、Yesで、お願いします」

私は彼女のお願いにNo、とは言えなかった。自分の行動に驚いたのもあるけれど、多分それがなくても私は頷いていただろう。

何故なら、彼女の瞳は美しかったから。触りたくなるほどの魔性の美しさを持った彼女の頼みを、私は断れない。今もそうだ。私は彼女に魅入ったまま、目が離せない。

彼女が恐ろしい。こんなにも、りょうちゃんは美しい人間だったのか。知らなかった。知ろうとしなかったし、それに、知りたくなかった。

緊張がピークを越えて、気を失いそうだ。恐ろしい。彼女が美しいということを知って、彼女が恐くなって、ますます彼女の前にいることが苦しくなって、ますます彼女が嫌いだと思った。

「そう、よかったわ。じゃあ、これからよろしくね」

「…うん。あの、お手柔らかにお願いします」

「もちろん。仲良くなれるよう頑張るわね」

「…と、とりあえず…今日は、そういうことで…解散、ということ  
で…」

「あら、一緒に帰りましょうよ。家はどっち？ バス通い？」

「バ、バスです」

「…どうして敬語を使うのかしら？」

「他意はありません」

ただ敬語を使ってあえて距離をつくることで嫌悪感を緩和しようとしてるだけだ。というか、そうしないと今すぐ逃げたくて仕方ない。

「…まあ、敬語でもいいわ。ただし慣れるまでにしてよ？ そう

じゃなきゃ、まるで私があなたに意地悪しているみたいじゃない」

「は…はい、頑張り、ます」

「ふふ」

笑われた。ううう。恥ずかしい。

「ほら、行きましょう」

微笑んだりようちゃんが立ち上がりながら、私の腕をひいた。

「ひゃ」

「なあに？　ずいぶん可愛い声ね」

「う……」

服ごしに捕まれた肘の少し先。そこに意識が集中してしまつて返事ができない。冬服の長袖で、熱なんて伝わるはずなのにどうしてか熱い。ストーブを近づけられたみたい。

痛くは全くないのに意識しすぎて強く圧迫されてるかのように感じる。触られた腕の筋肉が動かなくて制御が聞かない。ふるふる震えてきた。

「震えてるわよ？」

「は……はだっ」

「肌？」

「はなじっ……」

「鼻血？」

「い、いいい」

「……離すわよ」

「っはあっ、はー」

手を離されて、忘れていた呼吸を再開する。危ない。危うく窒息するところだった。

「だ、大丈夫？」

「だい、じよ、ぶ……はー」

全然大丈夫じゃない。この人といったら私、絶対死ぬ。嫌いな人と一緒にいると死ぬとか私、どれだけメンタル弱いんだ。

「りょうちゃん、あのねえ…」

「ごめんなさい。大丈夫だった？ 私、あなたに触らないほうがいい？」

「…大丈夫、です」

だから、そんな目で覗き込むように見ないでよー。ああー。心臓が痛い。この人といると心臓がうるさくて堪らない。それに暑い。さつきから体温あがりっぱなしだし、すごい汗かいてる。ヤバい。

「そう？ じゃあ、行きましようか」

「っ」

手を握られて立たされた。一気にまた苦しさが増して吐き気までしてきた。

手を離さなきゃ。そうしないと、死んでしまう。

「はい、鞆」

「あ、ありがとうございます…」

「バスはどこで降りるの？」

「…ば、x、xです」

「ふむふむ。私のひとつ手前ね。じゃあ急ぎましよう」

「っ…」

手を、振り払えない。しなきゃいけないのに。

手を引かれるまま、屋上を後にする。力が入らない私の手をりょうちゃんは握っている。

「……」

さつきと違って直接私の皮膚に、りょうちゃんの温もりや力加減が伝わってくる。

熱くて否応なしに手に汗をかいてしまう。彼女は気づいているのか。気持ち悪がられてたらどうしよう。ていうか、握り返した方が、いいの？ 嫌いさをなくすため、にはその方がいい、んだよね？

「……っあ」

手が動かない！

あああああやっぱ絶対無理無理無理ていうか最初からこの人を嫌いでなくなるとか無理ってわかってたよね！？ 無理！ 本当無理！ この感情絶対なくならないってなんか知らないけどわかるもん！  
！ この人のこと絶対嫌い！ もう無理！ 気絶する！

「？ どうかした？」

「どっ…どうもじゃせんっ」

この人嫌い！ なんで手を離そうとした瞬間にこっち向くの！？  
その顔見ちゃったら離せないじゃない！

私は人に命令されるのが嫌いだ。でも人のお願いを聞くのは嫌いじゃない。私の意思に関係なく強制されるのは嫌だけど、お願いは聞いてあげるものだからまだいい。むしろ、基本的にはお願いは断らない主義だ。

でもこの人のお願いは駄目だ。だって、見つめられると断れない。こんなの、命令と一緒にだ。

嫌い。命令する人なんて嫌い。

どうして、嫌ってほつきり言えないんだろう。弱虫な自分も嫌いだ。全部、嫌い。

どうして、嫌だと思っただろう。ただ手を繋ぐくらい、大したことないのに。こんなに意識して泣きそうになって、馬鹿みたいだ。

「っ、」

にぎ、握った。手、動いた。やった。

「ふふ」

「！」

私が勇気を振り絞ってやっとなのに、りょうちゃんは微笑んで簡単に、さらに強く握り返してきた。

負けた、と思った。敵わない。逆らえないという予感が、確信に代わって泣きそうになる。

りょうちゃんには、敵わない。

嫌いだ。この人絶対私の天敵だ。大っ嫌い。嫌いだから…逆らえないから…私ほただ、黙って彼女の後について行くしかない。

ただ従うしかないなんて屈辱的ですからある。恥ずかしい。こんなに私を辱めるなんて最悪。

本当に、大嫌いだ。



大好き。

と、余裕を持って部室を出た私だけど、どうにも落ち着かない。当たり前なんだけど、いくらちーちゃんと親しい坂之上さんと言え、絶対とは言えない。いくら屋上がお気に入りでも、毎回そこに行くとは限らない。

ミスをしないよう気持ちを落ち着けるためにゆっくりと部室を出たのに、また急に心配になってきた。

「ちーちゃん！」

「っ」

途中から駆け足になって階段を上がった私は勢いよく屋上へ続くドアを開けた。そして私はベンチに座るちーちゃんの姿を見て、ほっと安堵の息をついた。

「ごめんなさい」

「…え？」

近づく戸惑いながらも私の名前を口にするちーちゃんに、何かを言われる前に謝った。彼女はきょとんと首を傾げた。

可愛い、と思わず緩みそうな頬を固めて、あがった息を整えながら私は彼女に先程の狼藉を謝罪する。

「私…こそ、ごめん」

目をそらしながら彼女もまた私に謝罪してくれた。よかった、これで仲直りね。

「隣、いいかしら。少し話さない？」  
「…ん」

俯いたまま私を促すちーちゃんの隣に座る。思いきって密着しようか、なんて下心もあつたけどいざ座るとなると照れてしまって結局少し間をあけて座った。

それでもちよつと動けばすぐ隣にちーちゃんがいるのだと思うとドキドキして、じんわりと汗が吹き出してくる。

「ねえ、ちーちゃん」

「なに？」

名前を呼ぶとこちらを見て、でもすぐに視線を泳がすちーちゃんは顔が真っ赤でとても可愛くて、キスしたくなった。

好きだ。好き、好きと伝えたくて仕方ない。こんなに自分が堪え性のない人だとは知らなかった。

「さつきはあなたを怒らせてしまったし、こんなことを言っただけあなたを害さないか不安なのだけど…」

「な、なに？ 怒らないから言っただけよ」

ちら、ちらと私を見てくるちーちゃん。僅かずつ顔が私からさらされる。

真正面もいけれど、斜めから見るのもまたいい。ちーちゃんの長い睫毛や低めの鼻の筋がよく見える。

瞬きに揺れる睫毛と瞳に見とれてから、慌てて彼女に言葉を伝えるため、顔をひきしめる。

私から真面目な雰囲気を見てとったのか、ちーちゃんはよそ見をするのをやめて目を丸くして私を見つめ返した。

見つめ返されたのは、最初ぶりだ。それだけで私の体は勝手に緊

張して、喉がかわく。彼女に触れてすらいないのに、視線が向けられるだけで犯されてるかのように興奮する。

「さっきの…あなたが好きと言ったのは本当よ。私はあなたと仲良くなりたいわ。あなたは、私をどう思っているの？」

「っ…」

言った。はつきりと言った。彼女はもう逃げない。だから聞かせてほしい。態度でなく、言葉で、あなたの気持ちを。

「りょうちゃん…私は、あなたが、嫌いなもの」

「…え」

言われた言葉がわからなかった。真っ赤にして、強張った顔で、固く高くなった声で、告白をする乙女のような体で、彼女は私を嫌いと言った。

私が混乱していると彼女は私のどこが駄目ではなくて何故か最初からずっと嫌いなのだと言った。

「あなたを見るとイライラしたり息苦しくなったりして落ち着かなくて、生理的に駄目なの」

いや…それは、どう考えても、恋、でしょう？ 私が知らない間に恋の定義が代わったのかと勘繰りたくなる。だいたい、彼女の態度もまた、私を嫌っているものじゃない。

「…いくつか、聞いてもいいかしら」

「どうぞ」

「見るだけで苦しいとか…それって、世間一般的に、恋って言わなにかしら？」

「…は…いや、何言ってるの？ 私たち、女同士じゃない。有り得ないわ」

思いきって尋ねると呆れたように明快な答えが返ってきた。

「…そ、そうね」

何とか返事をして質問しながら頭の中で整理する。

つまり、彼女は私が思う通りに私に一目惚れをしてる。だけど恋愛は男女がするものだという強固な思い込みから、恋の症状を嫌悪によるものだと思ってる、と。

うつん、どうしようかしら。これは想定外だ。確実に両想いのはずなのに、私を嫌いと思い込んでいるとは。

正直面倒だけど、しかし私も確かに、苦しいくらいに彼女が好きだ。勘違いを直すだけで彼女と恋人になってあんなことやこんなことが出来るなら、なんだったとする。  
よし。

「私のどこがどう嫌いか教えてもらっていい？」  
「え」

戸惑うちーちゃん。それはそうだ。こんな質問をしたのは私も初めてだ。とりあえず口八丁で丸め込んで言わせる。

ちーちゃんは視線をそらして言いづらそうに、私をどんなに嫌いかと言った。

うつん、聞けば聞くほど彼女は私を好きだ。というか、聞いていてむず痒いくらいだ。嫌いだと思ってるからこそちーちゃんは照れもせずに言えるのだからうけど、私が照れる。

「真つ正面から顔を見ると気が遠くなるレベルでりょうちゃんが嫌いな。…そういうことだから、友達になるのは諦めて。ごめんね」  
「あ…いや、待って、結論を出すのはまだ早いわよ」  
「え？」

今にもさようなら、と言い出しそうなちーちゃんを止める。危うく彼女の声に聴き入るあまり聞き流すところだった。

「これから私の内面を知れば嫌いでなくなるかも知れないじゃない」  
実際には好きなのだから、嫌いでないと感じづく、というのが正しいのだけだ。

いきなり、本当はあなたは私が好きなのよ！と言ってもきつと頭のおかしい人と思われるでしょうし、何よりやはり、本人に自力で気づいてほしい。

「しばらくは友達（仮）ということでもいいかしら」

なので言葉を並べたててとりあえずお友達から始めましょうと提案する。

「でも…」

躊躇うちーちゃん。ここで断られたら私の恋が終わってしまう。距離をつめて気持ち伝わるように、間近で愛をこめて見つめた。

ちーちゃんは真つ赤な顔でぱーっとなった。今、私に見とれてるのだろう。かくいう私も見とれて見惚れてキスするのを我慢するのに一苦労だ。

突然、私の左目に目潰しするかのように私に指先を向けてきた。反射で瞼を閉じたから瞼ごしにそっと押された。

「っ…えっ、な、なに?」

「あっ…ごめっ、ごめんっ」

はっとしたようにちーちゃんは手を下ろした。無意識だったらしい。無意識に目潰しってどういうこと?と思ったけど本人も戸惑っているので追求しないことにする。

「えっと…返事はYes、ということでもいいのかしら?」

「…うん、Yesで、お願いします」

改めて聞くとちーちゃんは頷いた。心の中でガッツポーズ。

何故か私に敬語使ってくるけれど、多分照れ隠しなのでよしとする。

「慣れるまでにしてよ? そうじゃなきゃ、まるで私があなたに意地悪しているみたいじゃない」

「は…はい、頑張り、ます」

「ふふ」

彼女の緊張した態度が可愛くて思わず笑みがもれると、ちーちゃんは恥ずかしいのか肩を縮こませた。ますます可愛い。

「ほら、行きましょっ」

「ひゃ」

立ち上がりながら思いきって彼女の腕をひいたら、ちーちゃんは

これまた可愛い声をあげるものだから少し意地悪な気持ちになって、思わずからかいの言葉が口からでた。

「ずいぶん可愛らしい声ね」

くすくすと笑っているうちーちゃんは腰を浮かしかけた状態のままで。ついにはふるふる震えだした。

「っはあっ、はー」

日本語が不自由になるレベルまで緊張しているようなので手を離した。また腰をおろして大きく深呼吸する彼女に少し罪悪感が顔に滲みだす。

「だ、大丈夫？」

「だい、じょ、ぶ……はー……りょうちゃん、あのねえ……」

「ごめんなさい。大丈夫だった？ 私、あなたに触らないほうがいい？」

「…大丈夫、です」

触らないでと言われそうだったので先手をとるとOKが出た。やはりちーちゃんは押しに弱いタイプのようだ。事前情報からわかってはいたけど今確信した。

「そう？ じゃあ、行きましようか」

「っ」

立たせる名目で今度は手を握ってひいた。ちーちゃんは目を見開きながら立ち上がる。

柔らかい手。すべすべぶにぶにぶにで気持ちいい。手とはいえ夢にま

で見た彼女の地肌に触れているのだ。興奮で息があがりそう。

「急ぎましょう」

「っ……」

緊張してるのだろう。固い表示で反応の薄い彼女を促すように手を握ったまま屋上から出る。

「……」

ちーちゃんの手に触れている。それだけで死にそうなくらい心臓は高鳴り、鼻血が出そうなほど興奮する。可愛い。ちーちゃん可愛いわ、本当に可愛い。

今思い付いたのだけど、手を繋いでいるということは皮膚繋がりで、もう服の下を触っているようなものじゃないかしら。少なくともお腹くらいならもう触ったも同然な気がする。ああ、そう考えたらますます興奮する。

放課後、学校の誰もいない廊下で彼女に触れている。うっ……はあ……駄目、本気で濡れてきた。

「っ、」

と、靴箱につく手前でちーちゃんが、ずっと力なく握られていただけだった手で、私の手を握り返した。

驚いてちーちゃんを見ると、怯えた目をしていた。ちーちゃんは恐いんだ。好きとわからないまま、恋の症状の意味がわからなくて恐いまま、勇気をだして、私の手を握り返した。

それだけで、凄く嬉しかった。

「ふふ」

「！」

さらに強く握り返す。これ以上ないくらい真っ赤なまま、びくつと肩を揺らしてちーちゃんは俯いた。

なんて可愛いのか。もう、彼女を前にしたら私、可愛いしか言っていない気がする。

こんなに面倒な子、初めてなのに、全然嫌じゃない。むしろ愛おしい。

もう、敵わないわ。ちーちゃんには、敵わない。全面降伏だ。

この子が好きだ。この子のためならなんでもできる。いくらでも待てる。彼女のためなら、死ぬまで待てる。最後の一瞬だけでも報われるなら、一生一人でもいい。

彼女を崇めると言われても躊躇しない。彼女は私の神様だ。私の中の恋を具現化した、幻想の生き物だ。

それくらい、信じられないくらい、神懸かり的なまでに、彼女が好き。

ちーちゃんが、大好き。



大好き。(後書き)

最初はここまでで完結予定でしたが、再開しました。これ以降は多少書き方変わります。

りょうちゃんとお試して友達になってから、一週間が過ぎる頃にはとりあえず、彼女と同じ空間にいることには慣れた。というか慣れざるを得ない。

「おはよう。一緒に行きましようか」  
「おはよう…」

毎日一緒に登校した（同じバスだったらしい）。

「ちーちゃん、お昼食べましょ」  
「…うん」

毎日お昼を一緒した（何故か隆美ちゃんは別の友達のとこへ行くちやう）。

「ちーちゃん、部活行きましょ」  
「うん…」

そして当然だけど、毎日部活で一緒。

これで慣れなきゃ嘘だ。半径1m以内に近寄られても意識はするけど汗はかかなくなったし、会話中も5分に1度は顔を見てきよどらずにいられるようになった。

まあ、まだ30cm以内だと汗出て体温あがるし、目があつと緊張できよどつて喉が渴いちゃうんだけど。これでも私には大進歩だ。

「りょうちゃん、部活行くよ」

「ええ」

にここにこと笑顔を浮かべるりょうちゃんから思わず目を逸らす。りょうちゃんは凄く綺麗な顔をしてるけど、笑うとなんだか可愛い系だ。そう素直に思うのに、何故か真つすぐりょうちゃんの顔を見れない。

どうしてと疑問を浮かべる前に心臓がどきどきとうるさくなって、うまく考えられない。

たまには、慣れたし、と思つて初めて自分から声をかけたのだけど、失敗だ。

声をかけたくらいでそんな笑顔にならないでよ。やめて。さつきまで平気だったのに、急にあなたから離れたくなってしまう。やけに体が熱い。

彼女と近づく度に、体調が悪い。本当に慢性的風邪にでもかかってしまったんじゃないかと誤解してしまいそうだ。

彼女に気づかれないように、何とか平静を装いながら私は彼女と並んで部室に向かう。

横に並べば顔を見なくても自然で少しほっとする。ゆっくり気づかれないように息を深くして、なんとか落ち着いた。

鍵を開けて部室に入るころには、私の鼓動も通常運転に戻った。

「……………」

特に言葉もなく、私は窓を開け、りょうちゃんはコーヒをいれてくれ、それから向かいあつて座る。

コーヒは二日目からいれてくれるようになった。

「……」

口に含んで飲み込む。私の好みのようにちゃんとミルクと砂糖がたっぷり入っていて美味しい。美味しいはずなのに、飲むたびに胸が少しだけ締め付けられる。

きっと彼女のことを嫌いすぎて、彼女のやることなすこと文句をつけたくて体が拒否反応を起こしているのだろう。

我がことなのに、自分でも推測しなきゃわからないなんて滑稽だ。彼女に関してだけは体が勝手に反応してしまつて制御が効かない。

「……」

今もそうだ。ようやく慣れたと言つて、それはあくまで普通に会話できる、近づいても鳥肌がたたない、というレベルだ。

今だに彼女からは凄まじい存在感、というか威圧感だろうか。わからない。とにかく彼女がそこにいると見ていなくてもそこに意識を集中させてしまう。意識せずにはいられない。

彼女が入部してから、ろくに本を読みすすめられない。しかも最悪なことに、家に帰つてもそれは続く。

夜になり、ご飯を食べてお風呂にも入つて落ち着いて、暇つぶし本を読もうとすると、何故か急にりょうちゃんのことを思いだしてしまう。

友達（仮）になつた日につないだ手の感触や、彼女の瞳の美しさや、なんでもないはずの私への呼びかける声が頭の中を駆け巡る。するともう何も手につかなくて、ちよつとだけ胸が苦しくなつて、気づけば寝る時間になつている。

そんな時間が、実はさらに増えている。今も気をぬくとふいに、彼女の先程の笑みが頭にちらつく。

なんなのだろう。もう本当にうっとおしいからやめてほしい。り

ようちゃんが悪いわけじゃないのはわかってる。

でも本を全然読めないまま返却期限が近いし、今日なんてりょうちゃんを見つめて授業中にまたぼんやりしてしまって、初めてノートに空白ができてしまった。終わってから隆美ちゃんに頼んで写させてもらったけれど、はつきり言って異常だ。

りょうちゃんがいるだけで気になって他のことが手につかないならまだしも、側にいないのにまだ私の読書の邪魔をしたりするのは本当に勘弁してほしい。

「はあ……」

「？ あら、ため息なんてついてどうかした？」

「や、やあ……何でもないよ」

「そう？ もし悩みがあるなら遠慮なく言っちょうだいよ？ 私、

ちーちゃんとはもつと仲良しになりたいもの」

「うん、ありがとう……」

まただ。また、胸が苦しくなった。さらに動悸の激しさまで加わって、暑くなる。

なんだろう。何故か彼女といると切なさで泣きたくなる。今まで切ないと感じたことがないから、本当にこれが切ないという感情なのか自信がないけど。どちらにせよ理由がわからない。

「……」

微笑んでから、私が朝に勧めて貸した本にまた視線を落としたりようちゃんをこっそり見つめる。

りょうちゃんは私より背が高いのに、私と座高が変わらないのかちょっと俯き気味になるだけでつむじが見える。てっぺんのやや前の方に一つだ。

ふいに、そのつむじが押したくなった。

嫌いで仕方ないはずなのに、嫌いすぎて無視できなくて意識しすぎてしまうくらいなのに、私はあの日から彼女に時々触れたいと思う。見つめたくて、触れたい、だなんて…自分でもどうかしてると思う。まるで恋のようだ。

でも違う。私は彼女が嫌いなのだ。だって私が今までに触れたいと思った彼女の部位は、眼球、うなじ、手首、指先、鎖骨、つむじだ。

眼球なんてあからさまなものから、つむじなんて地味なところまで攻撃する場所だ。つむじを押して下痢になるのが本当かは知らないが、私はそう思っているので無意識にそこを攻撃したがっているのだろう。

眼球の時点で妙だと思って自己分析したが、まさかいくら嫌いとは言え無意識にりょうちゃんへ攻撃する場所を見極めているとは。いったいなにがそんなにりょうちゃんへの憎悪になっているのか不思議でたまらない、と他人事のように考える。

りょうちゃんは美人で可愛くて絵がうまくて、めちゃくちゃ頭がよくてもけして鼻にかけなくて、性格もフレンドリーで親切だ。普通なら好きになると思う。

なのに私の体は、彼女が近づくだけで息すらできなくなる。さらに近づくと、思考さえできないくらい苦しくなる。

なんなんだろう。前世で殺されたとか？ …馬鹿馬鹿しい。でも、そう思ってしまうくらい、私の彼女への反応は異常だ。

「ちーちゃん、どうかした？」

「あ、や…ごめん、なんでもない」

ふいに顔をあげたりりょうちゃんとはつちり目があったってしまった。微笑みながら尋ねてくるりょうちゃんに、私はバツが悪いと思いながらも何故か猛烈に恥ずかしくて顔が熱くなってしまうて俯きながら否定する。

「そう？ てつきり私に見とれてたのかと思ったわ」

「りょうちゃんってば、ナルシスト？ そりゃあ、りょうちゃん美人さんだけど、あんまりそういうこと自分で言わないほうがいいよ」

りょうちゃんの軽口は当たらずとも遠からずだったので、一瞬どきとしたけれど平静を装い軽口を返す。

視線を戻すと柔らかい彼女の眼差しとぶつかり、動かせなくなる。やっぱり彼女の瞳は美しい。とても綺麗。

「あら、美人と思ってくれてるのね、ありがとう」

「もう。りょうちゃんは口が減らないなあ」

「一個しかないもの」

「あのね…まあいいわ。りょうちゃん、面白い？」

「ん、ああ。まだ途中だけど、面白いわ。さすがちーちゃんのオススメね」

「その本シリーズ私全部集めてるの。長いからいっぱいあるけど、そのうちその本棚に並べるから、好きに読んでね」

「あら、大変じゃない？」

「私、本は重く感じないの。それに何回かにわけて運ぶから大丈夫。勧めても素直に読んでくれる人って身近にいないから、りょうちゃんが入ってきてくれて嬉しいわ」

嘘だ。彼女に言ったことは全部本当で、隆美ちゃん繋がりのお体育会系の知り合いばかりで、オススメを褒められたのも嬉しい。だけ

ど、入ってきてほしくなかった。

私だけが本を読む空間で良かったのに。彼女でなければ、ただ本を読む仲間なら歓迎したかも知れない。だけど入ってきたのはりょうちゃん、私の読書の邪魔になる人だ。

りょうちゃんに何とか慣れてきて会話をできるようになったのはいいけど、やはり緊張してるのか色々口を滑らせてしまう。

リップサービスをするつもりはなくて、むしろりょうちゃんも私を嫌ってくれば都合がよいのに、どうして私は彼女を歓迎するよくなことを言ってるのだ。

「んー、じゃあこうしましょ。明日休みでしょ？」

「そりゃあ、今日は金曜日だからね」

「明日取りに行くわ。それで一緒に学校に運びましょう」

「え……」

「都合が悪い？ それとも休みの日に学校に行くなんて論外、というタイプ？」

「それは…大丈夫だけど」

「なら決まりね。ついでに遊びましょ」

何故に休日まで彼女と会って疲れなきやいけないのか。平日にちよつとずつ運ぶとでも言えばいくらでも断れるだろう。今すぐ断れ。そんな風に自分に命令したのに、何故か私は頷いていた。

「何かしたいことはある？」

「…りょうちゃんに合わせるよ」

りょうちゃんの瞳は綺麗で、綺麗すぎて、捕まってしまうえばやすとは視線を外せない。

だから私は、彼女の言うことには頷くしかできない。

嫌いだと言うのは大袈裟だけど、体だけじゃなく気持ち的にもやはり、好きにはなれない。

私の自由を奪ってしまう。りょうちゃんだけが、私を簡単に不自由にさせる。苦手で、やっぱり…嫌いだ。

早く諦めて、部活もやめて、私の前からいなくなればいい。そうすれば清々する。絶対にその方がいい。

なのにそう言えない。消えてなんて言えない。友達（仮）になると言ったけど、どうしてか他の、隆美ちゃんのようにには思えない。そんな風に自然に接したりできない。

蛇に睨まれた蛙って、多分こんな気持ちだ。

私は見つめあって徐々にあがる体温と鼓動を自覚しながらも、とめられない自分がふがいなく、明日を思っただけで憂鬱になった。

「じゃあとっておきに連れて行ってあげる」

「わぁ、なにそれ」

「内緒よ。明日のお楽しみにしてね」

「うん…楽しみにするね」

口だけが、私の意思を無視して弧を描いた。



## 憂鬱（後書き）

感想にて続きを望まれたので再開。

無駄にごちゃごちゃ回りくどい文章ですぐ語彙がつきてしまうので、微妙に同じこと言ってるかも。

てか書いてから少し時間がたったのでどんな表現したか忘れたからちょっと悩んだ。

多少書き方変えるかも知れんが、とりあえず完結まで持つてくつもり。中編予定で。

## 幸福

明日はなんとデート。

「くふふふふふ」

デート。ついにデート。これはもう勝ったも同然。10日近く欲望を制し、理性的により友人を演じた私の努力がついに実ったのだ！きつと今頃はちーちゃんも私への恋心を自覚しベットで転がっているころだろう。

「くふ」

おっと、いけない。転がるちーちゃんを想像したら思わずはだけた服装で太ももチラチラな姿にしまった。

「はああ…ちーちゃん」

彼女の愛称を口にしつつ目を閉じ、頭の中で振り向く彼女を思い浮かべる。

振り向いたちーちゃんは少しだけ肩に力をいれたように縮こまり、肩をすくめたような姿勢でわずかに上目遣いになりながら私を見る。格好はもちろん私服。どんな格好だろう。制服のスカートの長さを全くいじらない彼女だけど真面目さからでなく、単に興味がないからだ。だからきつと地味系の格好に違いない。しかしそれがいい。ちーちゃんの魅力は私だけがわかっていればいい。もちろんあの小さな小動物みたいな可愛さはふりふりスカートなんてめちゃくちゃ似合うだろうから、付き合うことになったらふたりきりの時に着

せるとして。

「…ん？」

はて、そういえばデート、私の服はどうしようか。浮かれて彼女のことばかり考えていたが、よく考えればこれにより私のイメージが改めて固まる一代チャンスだ。

ベットに寝転ぶのをやめて、私は部屋の隅のクローゼットを開けて中に入る。とっておきの服はこの2畳ほどのクローゼットに入れているのだ。

さて、今までにもクール系を気取っていたつもりだし、クラシカルワンピースでシックな感じ？ いや、ズボンでスマートに？

私はなにげに今まで結構なキャラチェンをした過去を持つので様々な系統の服がある。ゴスロリなんかも1着あるし、パンク系も少しハマったので多少レパートリーがある。

ふむ…ちーちゃんが可愛い系だし、ここはカッコイイ系がやはりベストだろう。あまりはっちゃけてもあれだから大人しめで……うーん、悩むわね。

と、そういえば眼鏡はどうしようか。視力が悪いと言っても両目0.2で、日常生活自体は眼鏡がなくても平気だ。あんまりがりととも思われたくないし、目が疲れるので授業中以外はあまりかけない。

最近ちーちゃんをしつかり見るため、たまに授業中以外もかけているが、ちーちゃんはそれに気づいているだろうか。せつかくのデートだ。ちーちゃんの姿をよりよく見たい。しかし眼鏡をかけるとファクションの幅が……。

あいにくと眼鏡は使い分けるほどは持っていない。慣れた場所で

遊ぶ分には眼鏡がなくても困らないから、今までは何も思わなかった。悩む。非常に悩む。

出来れば最初の待ち合わせ時には眼鏡でしつかり私服ちーちゃんを見て、移動中ははずして、肝心な時だけかけたりしたいのだけどそもいかない。一日中眼鏡は疲れるし、かけたりはずしたりは怪しい。コンタクトレンズは怖いから却下。

「……よし」

やっぱり、いつも通り、というか普段着の中でよさ気を選ぼう。そして眼鏡はかけよう。

あんまり張り切りまくって、ちーちゃんとの対比で浮いたら恥ずかしい。デートと言ってもきつと彼女にそんなつもりはないだろうし。

それに、ちーちゃんには素の私を見て好きになってもらいたい。うん、我ながら今ちょっと恥ずかしいこと言った。

そうと決まれば、明日の服を決めよう。私はクローゼットから出て、箆笥を開いていくつかベツトに放りだす。

ズボンはジーパンで。これで一気に普段着。あとはシャツと上着でシンプルに。

こんなものか。多少男っぽいけど、実はこんな格好が一番楽で好きだ。ちーちゃんの好みにあえばいいのだけど。

あれきり繫いでいないから、明日は思い切って手を繫いでみようかな。

「はぁ…楽しみ」

「ちー、ちゃん？」

「りょうちゃん？」

「どうして制服なの？」

バスを降りた私を迎えたのはいつもと変わらず制服姿のちーちゃんだった。がっかりしながら尋ねるとちーちゃんは首を傾げた。

「それはこっちの台詞なんだけど……何で私服？ 今日学校に行くんだよ？」

「……」

そう、か。いや、もちろんわかっていたが、休日だしデートだし、ちよっと荷物置くだけだから私服かと。学生証は持っているし。

もしかして駄目な学校だったのか。前のところは進学校のわりにゆるかったし、こっちはお嬢様学校なことを忘れていた。しまったな。一度帰って着替えてくるか。

自分の場違いさに少し恥ずかしくなって、私は頭をかきながら待つように頼 -

「仕方ないなあ。制服貸してあげるから、あがって」

何故かちーちゃんは苦笑すると私を家に招き入れた。

動揺し、言われるまま玄関をくぐり、スリッパにはきかえ、部屋に通された。

部屋はピンクを基調としてぬいぐるみがある可愛いいかにも女の子らしい部屋だった。普段の飾り気のなさからは何となく意外だけど、容姿にはとてつもなく似合っている。

ちーちゃんの部屋はどことなく甘い匂いがする。芳香剤の匂いではない。私の部屋に合う匂いを探すため芳香剤は一通り嗅ぎ回ったので、違うのがわかる。

恐らくちーちゃん自身の体臭が集まって部屋の匂いになってるのだろう。体臭とかマジ興奮する。こっそり胸いっぱい吸い込むといかに紳士的な私でもちよっと濡れた。

「スカートと、シャツと上着。セーターは替えがないから上着でいいよね」

「え、ええ」

渡された服を受け取りながら、思わずキョドる。え、まさか本当に？ 服を貸してくれるの？

「？ どうしたの？」

「いや、えと、ありがとう」

う、うわ。これは予想外。まさかちーちゃんの服を着れるなんて普段ちーちゃんの肌をおおっている布を纏うのは何となく気恥ずかしい、というかエロずかしい。ごめん、意味わからない。ちよつと興奮して馬鹿になつてる。

制服を着ると、いまだこの制服のブレザーを着ていないのもあつ

て新鮮で、ちーちゃんに包まれてる気もするので何だかむらむらする。

「りょうちゃんはブレザーも似合うね」

「ありがとう」

褒められた。しかも『も』ってことは普段のセーターも似合ってるってことよね？ あー！ テンションあがる！

「さ、行こっか」

あ、もう行くの？ いや、うん、わかってるけどね。もうちょっとこの部屋にいたいな、なんて。

「？」

あ、うん、何でもありません。

私はいぶかしむちーちゃんに慌てて笑いごまかして、服を渡された紙袋に入れてちーちゃんに続いて部屋を出た。

あー、もうちょっとだけちーちゃんの体臭を堪能したかったのに。まあいいわ。恋人になれば直接嗅げるものね。

玄関にはさつきは気づかなかったけど紙袋が二つあった。

せっかくだからと言うことで、他にもちーちゃんオススメの本を詰めて二つ用意したらしい。一つ持つ。

うわ、重い。筆より重いものは持てないは言い過ぎにしても乙女の片腕にはきつい。両手で……。

「ちーちゃんって結構力持ち？」

「え？ もしかして重い？」

「いやいや、そうじゃないわよ。だけどちーちゃんのように可愛らしい細腕では持てるのかと心配していたから意外だっただけよ」

「私、運動は苦手だけど腕力とか結構ある方なの」

普段から本を持ち歩いているからだと思う、というりょうちゃんは私と同じだけ入っている紙袋を普通に片手で持っている。

「……………」

さすがに、無理してまで全部持つてやるよと格好つけるつもりはさらさらなかった。私女だし腕力自慢してどうするって話だ。

でも、私より小さく可憐なちーちゃんが片手で持っているものに両手をつかえるだろうか？ 正解はもちろんNO。いくらなんでも非力とは思われたくない。どちらかといえば頼れるキャラでいたいのだ。

「さ、行きましょか」

重い…………指に紐が食い込んで痛い。我慢だ私。バスの中なら降ろせる。

「よし」

ちーちゃんは本を並べてご満悦だ。この無防備に無邪気な満足顔が見られただけで苦勞がむくわれると言うものだ。

まさか本棚に収めるために片付けで1時間も使うとは思わなかった。場所がないなら積むとか、本棚は大きいから本の手前にも置くのに背表紙が一目で一覽できなきゃ嫌らしく、多くの私物を片付けて埃を掃除するのに時間がかかった。

ちーちゃんは本棚は毎日掃除して行くせに、他の子の私物はあんまりしないらしく結構埃がたまっていた。一ヶ月に一回はするらしいけど、ついでに掃除したら一週間に一回掃除してはるの部屋の隅にはたんまり埃がたまっていた。ぱつと見は綺麗だけど見えないところは手をぬいているらしい。

なんて取り繕うのが上手いのかしら。ちーちゃんたらめんどくさがりなところもあるのね。可愛い。

別に恋故の盲目じゃないわよ。ちーちゃんって何気にしつかりさんだから、ちょっと駄目さがあつた方が、お世話しがいがあるとつものだ。私って結構尽くすタイプだから、相性バツチりね。もちろん尽くしたいのはちーちゃんだけによ。

「ちーちゃん、ちーちゃん。そろそろいい時間だからお昼を食べに行きましょうか」

「あ」

「ん？」

「あの……」

「？」

ちーちゃんはもじもじと、私を悶え死にさせるつもりなら大ヒツト間違いなしの態度で上目遣いをしてくる。顔は赤くてまさに恋す

る乙女。

可愛いいいい。ああもう抱きしめたい。

「…な、何でもない。お昼行こうか」

「ええ」

よくわからないけど何でもないというならいいか。抱きしめるのはやり過ぎにしても、さりげなく校舎を出るあたりで手を繋いでみた。

「っ」

柔らかく小さい手はぶにぶにしている、触れているだけで私の体温は急上昇して胸が痛いくらいドキドキする。

その痛みが心地好い。M的な意味じゃなく、苦しいほどちーちゃんが好きなんだと思うと誇らしいくらいだ。

ちーちゃんは真っ赤になっておどおどとしながら私と手を交互に見て、口を半開きにして何かを言おうとしている。

「…駄目？」

「……」

先に尋ねた。先手必勝だ。ずるいなんて思わないでね。だって、ちーちゃんと手を繋いでたいんだもの。

ちーちゃんは、あ、とか、う、とかもごもご言ってから、黙って俯いて、ぎゅっと私の手を握り返した。

ドキドキと心臓がうるさくて、神経の全てがちーちゃんと繋いだ手に集中して他のことはどうでもよくなる。

ふわふわとまるで宙を歩いているかのようだ。こんなに幸せな気持ちになるなんて、本当の恋は素晴らしい。

彼女に出会うまで知らなかった。

彼女に出会うまで、私は真の幸福を知らなかったとさえ言える。

ああ、なんて幸せなんだろう。

## 幸福（後書き）

だいたい話の流れを考えました。順当にいけば10話くらいで終わる予定です。

## 目眩

どうしてこうなったのだろう。

何度も何度も頭の中でどうしてと自問しているけど答えはでない。いや、もう出ている、のだろうか。

「ちーちゃん、美味しい？」

「うん」

美味しい……と思う。

昨日、りょうちゃんが言っていたとおきと言うのはクレープ屋のことだった。私の方が地元ではあるけれど、りょうちゃんの家  
の近所にある小さなクレープ屋らしく知らなかった。

野菜にこだわったクレープ屋らしく、甘くないクレープが殆どで、  
昼食にと食べるにきたのだ。

それはいいのだけど…

「あの、手…」

「あ、嫌？」

校舎を出て勢いで繋がれたまま、私は彼女と手を繋ぎっぱなしだ。  
私の利き手は右でりょうちゃんは左手で、手を繋いだまま食べられるクレープなのでやめる理由が見つからない。

なのでやめさせるためには嫌、という感情による否定しか方法はない。方法は簡単だ。嫌だ、と言えばいい。

「い…」

「い？」

「嫌……じゃ、ない」

「そう、ならいいわよね」

よくない。全然よくない。

……でも、じゃあ、嫌か、という話だ。緊張してご飯の味がわからないし離したいのに、振り払おうとか、そんな風には思えない。

馴れ馴れしいりょうちゃんをうっとうしいとすら思うのに、りょうちゃんのこと大嫌いなのに………繋がった手から伝わるりょうちゃんの熱さが、嫌いではない。

ドキドキして目眩がしそうなほどくらくらして、判断が鈍っているのかも知れない。

りょうちゃんの手、何だか、気持ちいい。ドキドキしてふわふわして、くらくらするのにな、その原因のりょうちゃんを拒否すべきなのに、近寄りたいたいと思っている。

どうしたんだろう。私は一体どうなってしまったんだ。

変だ。手を繋いでから変だ。

いや、違う。もっと前、ちーちゃんと出会ってから、ずっと変だ。

「さて、次どこに行く？」

帰りたい。だけど強引にとはいえお昼を奢られてしまったし、そんなこと言えない。

何かお返しをしなければ。

「駅前の百貨店行かない？」

「ん？ 何か欲しいものあるの？」

「まあね。いい？」

「もちろんいいわよ。ささ、レッツゴー」

テンションの高いりょうちゃんに引つ張られながら、私たちは歩いている。

なのに地に足がついている気が全くしない。ふわふわして、気持ち悪い。

誰か私を助けて。

「りょうちゃん」

「ちーちゃん、おかえり」

「ただいま。これ…プレゼント」

トイレとごまかしてりょうちゃんと一旦別れて、こっそり買っただけのラッピングしてもらったものを差し出すと、りょうちゃんはきょとんとしている。

普段大人びていて、余裕げな笑みを浮かべているのが常なりょうちゃんだけに、そんな表情は可愛くてちょっとだけ笑った。

「え？ 私に？」

「他に誰がいる？」

「え？ ど、どうして？」

「さっきお昼奢ってくれたから、お礼」

「そんな、いいのに…ありがとう。大切にするわね」

押しつけるようにするとりょうちゃんは受けとって来て、微笑んだ。その笑顔に何故か鳥肌がたった。

慌てて私は視線をそらす。

「まあ、安物だけどね」

りょうちゃんに関わるともはや発作のように私の体は異変をきたす。

「安い高いは関係ないわよ。ちーちゃんがプレゼントしてくれたことが重要なんじゃない」

「……ん」

言いたいことはわかる。物そのものより気持ち、なんてごく一般的なことだ。なのにどうしてか過剰にその言葉をとらえて意識してしまう。どうかしている。

「ねえちーちゃん、これどこで買ったの？ 私からもあなたにプレゼントしたいわ。お揃いにしましょ」

「あ…えと…買ったのは、東出口近くの雑貨屋なんだけど…私は、いいよ」

「え？ どうして？ 遠慮しなくていいわよ」

「遠慮じゃない。とにかく、いいってば」

「そ？ そっ？」

言えるわけがない。本当はりょうちゃんにあげた手の平サイズのティンベアのついたキーホルダー、すでに私とお揃いだなんて。

別に変な意図なんかなくて、ただお気に入り得手頃だからりょう

ちゃんへのプレゼントに選んだだけだ。でも勝手にお揃いにしたとか気持ち悪がられても嫌だし、だからって買ってもらうのは悪い。慌てて断ったので多少ぶっきらぼうな物言いになってしまったけれど、りょうちゃんは気にした風でもなくキーホルダーを鞆にいれたのでほっとする。

「トイレが嫌に長いと思ったけど、そういうことだったのね。ありがとう」

「え…」

りょうちゃんの冗談じみた言葉に、私はトイレが長いと認識させることの意味を自覚して、羞恥で頭がいっぱいになった。

いや、そりゃ、大便しない人なんかいないしそう思われたいわけじゃない。もう誤解もとけた。だけど、さっきまでそうだと思われてた事實は消えないわけで…。

ああ！ りょうちゃんにうんこしてたと思われたとかほんと最悪でかめちゃくちや恥ずかしい！！

うっあああ…もう！ 何でそんなこと言うわけ！？ 言われなきやそんな風に思われてるって気づかなかったのにりょうちゃんの馬鹿！ デリカシーなさすぎ！

「ち、ちーちゃん？ ごめんなさい、そんなに恥ずかしい？ あの…いい意味だから、ね？」

いい意味とかどんなよ！ あれか！？ うんこしてるってことは今日も元気なんだとか！？ 全然よくないしむしろ恥ずかしい！！

「ごめんなさい。反省してるから…許してくれないかしら？」

と言いながらりょうちゃんは私の頭を撫でた。

「ばっ…」

頭を触られるなんてもう何年もない。しかも相手が大嫌いなりよ  
うちさんとあって私は完全にパニックになってしまった。

「あ、あ、あ…」

「えっ？」

「や、やめ…うっ、うー！ りょうちゃんの馬鹿！」

何が何だかわからなくて、子供扱いされているのが何故か悲しく  
て、私は彼女の手を振り払って走り出した。

「ちーちゃん!？」

うっう ああああもうやだああ!!

途中ですっぱかすなんて初めてで、バスを待つ間とか何度かやっ  
ぱり戻って謝ろうか悩んだ。けどどんな顔をしていいのかわから  
なくて、結局帰ってきてしまった。

部屋に入って、鞆を机にほっぽりだし、セーターとスカートを脱  
いで、皺にならないように床に優しく投げてベッドに転がった。

シャツは皺になるが、今日で洗濯してアイロンあてるから問題ない。

「はぁあ…」

ため息をついて目を閉じる。自然と今日のことか思い返される。ちーちゃんの私服、意外だったけれど似合っていた。男の子みたくて結構カッコよかった。美人は何でも似合うんだなと思ったものだ。

片付けまで手伝ってもらっちゃって、ちゃんとお礼言いたかったのに、先にお昼と話題を変えられてしまっただけで言いがらなくなった。

りょうちゃんはさっぱりあっさりした性格らしく、私が多少態度悪くても全然気にしないでニコニコしてる。

そんなりょうちゃんだから余計に、お礼すら言えない自分に自己嫌悪してしまう。軽口は言えるのに、大事なことを、気持ちを伝えようとすると何故か恥ずかしいような、妙なたたまねなさで何も言えなくなってしまうのだ。

そして、手を繋いだ。

「……っ」

寝返りをうつって膝をかかえるように丸まって、私は繋いでいた手をぎゅっと抱きしめた。

ドキドキと、心臓が痛いくらい脈打っている。りょうちゃんの手は柔らかさや熱さを思い返したただけなのに、手が震える。

苦しい。息が詰まる。優しいりょうちゃん笑顔が瞼に焼き付いて離れない。

「はっ…っ」

苦しい。苦しい。何だこれ。

怒り？ 悲しみ？ わからない。そもそも私は何がそんなに嫌なんだ。何が気に食わない？ …わからない。

胸が痛い。

何故か、涙が出てきた。りょうちゃんが嫌いだとして、どうして私は泣いているの？

自分で自分がわからない。

大嫌いなはずなのに、りょうちゃんと手を繋ぐのに嫌悪しなかった。じゃあ、嫌いじゃないなら、いったいなんなんだ。

他にどんな感情を持っていると仮定すれば、こんなめちゃくちゃな情緒不安定な私に説明がつくというのだ。

憤り？ 恐怖？ 憧れ？ 嫉妬？

今の自分が何を感じているのかすらわからない。頭の中が無茶苦茶だ。りょうちゃんのことしか考えてないのに、頭の中はりょうちゃんदैいっぱいなのに、それに対する感情の名前すらわからない。

「う、ううっ」

ポロポロと涙が出る。これはなんだ。私は泣き虫じゃない。涙なんて何年ぶりだ。なのにどうして、涙の訳がわからない？

わからない。なにもわからない。もう嫌だ。

りょうちゃんと出会わなければ、こんな訳のわからない気持ちにならずにすんだのに。

こんなのは私じゃない。何もわからずに苦しんで八つ当たりして泣いて、こんなの変だ。自分で自分が気持ち悪い。

もつうんざりだ。りょうちゃん存在に掻き乱されてぶりまわさ

れて、そんなのもううんざりだ。もう疲れた。

りょうちゃんが嫌いだとか、そうじゃないとか、もうどうでもいい。全部やめよう。

こんな思いはたくさんだ。もうりょうちゃんには関わらない。元の私に戻るんだ。

土台無理な話だったんだ。りょうちゃんと友達になるなんて。一緒にいて相手を意識しすぎてしまうのに、友達になんてなれるはずがない。自然に振る舞えないのに、友達なんて言えるはずない。

ごめん、りょうちゃん。だけど私には、りょうちゃんの友達でいるなんて我慢できない。

明日から、距離をとろう。

## 絶望

ちーちゃんがプレゼントしてくれたのはとても嬉しかった。でも、ん？と思ったのはまずここで、ちーちゃんは執拗に私とのお揃いを断った。

それはまあショックだったけれど、恥ずかしがってるのだろう、可愛いなあで済む話だ。

だけど頭を撫でた時、ちーちゃんは真っ赤になって走って帰ってしまった。

私がデリカシーのないことを言った自覚はあるけれど、まさか怒って帰ってしまうとは思わなくて、うるたえてちーちゃんの後をつけてしまった。

ちーちゃんはぐずぐずと鼻をすすって涙目でそわそわしながら家に帰り、それを見届けてから私も家に帰った。

何がいけなかったのか。無遠慮なところはあったし、ちーちゃんにはもつとそつと優しく接するべきだったのだろうと推測する。ちーちゃんは私を嫌いとお勘違いしているのだから、もう少しのんびり付き合っただけあげべきだった。反省。

夜になり、ちーちゃんも落ち着いただろう頃にメールを送った。

『今日はおめんなさい』

短いと我ながら思う。最初もつと沢山言い訳を書いたけど、あまりに要領を得ないまわりくどくだらだらした文章になってしまい、推敲に推敲を重ねた結果短文になった。

返事を今か今かと携帯電話に張り付くこと一時間、ようやく来た返事もまた短かった。

『やっぱり友達は無理』

え？

本当にえ？と声をだして、何度も読んで、当然文章はわからない。下に動かそうとしても動かないから、改行してから本音を書くみたいなお茶目ーでもない。

「…………え？」

意味もなく携帯電話をひっくり返し、画面を180度回したり横にしたりして、もう一度読む。

『やっぱり友達は無理』

「…………」

わからない。当然だ。うん……………なんで？ え？ 意味がわからない。だって、え？

混乱。困惑。メダパニ。意味がわからない。

今すぐに、メールを、いや電話をして聞きたかった。どういう意味なの？ 私が悪かったわ。友達くらいならいいじゃない。

ねえ……………私のこと、嫌い？

そんなこと、聞けない。

今までずっと、盲目的なまでに信じていた。信じられた。両思いなんだって、疑いもしなかった。

だけどわからなくなつた。急に不安になる。本当に本当は、私を嫌いだつた？ 全て勘違い？ 私の一人相撲？

嫌がるちーちゃんに無理矢理近づいて、無理させていた？

「っ……」

聞きたい。でもちーちゃんに、そうだと肯定されたら？ 今までは好きの裏返しだと信じていたから平気だつた。でも、本気だつたら？

そんなの、堪えられない。

私は頭をふつて、考えを切り替える。

考えすぎだ。いきなりネガティブになるにもほどがある。

私を嫌い勘違いの末の行動かも知れない。だって、あんな顔を私に向けるのだ。真っ赤で睨むみたいに強い眼差しを………怒りで赤く睨んでいる、と解釈することもできる。

おもわせぶりの態度はただ優柔不断なだけ、ちーちゃんの挙動は悪く悪く考えればどちらともとれなくもない。何せ本人が嫌いと思うほどののだから、当たり前といえは当たり前だ。

だけどあれが恋と思つたのは私にあてはめれば当然そうだからで、ちーちゃんが全く同じ症状を怒りにより発症する可能性が皆無ではない。

「……」

結局、私はちーちゃんに連絡できなかつた。

いくじなし、と自分を罵っても、脳内でちーちゃんボイスに変換して罵っても、勇気はでなかった。

日曜を挟んで、月曜日。先週なら、ちーちゃんと会えるとわくわく気分だったのに、今週はサボりたい。ちーちゃんに会うのが怖い。学校に行きたくない。

こんなにサボりたくなつたのは、去年間違えて眉毛を全剃りしてしまつて以来だ。ああ、最悪だ。

「おはよー」

「おはよう、隆美ちゃん」

ちーちゃんの姿が目に入った。思わず人混みに紛れるように歩みを遅め、二人の様子を伺う。

「なんか元気くない？」

「んー、まあぼちぼち」

「意味フー」

何をしてるんだ私は。早く声をかければいい。おはよ、なんて軽く言いながら隣を歩けば自然だ。

「……」

どうしてか、ちーちゃんに近寄れない。それどころか、顔をあわせたくない。

もし、ちーちゃんが私を見て嫌な顔をしたら？　もしちーちゃんが私と距離をとったら？

そんなの堪えられない。そうになったらと考えるだけで、恐くて震えそうだ。

ちーちゃん…。

「ね、予習やってるんでしょ？　今日当たる日だから答え写させて」「えー？　写させるのは駄目っていつも言ってるでしょ」

たわいない会話をするちーちゃんの声、後ろ姿、ちらと見える横顔。

その全てが、私をときめかせる。

こうしてただ見つめるだけで、じんわりと幸せな気持ちになる。だけど、ちーちゃんに近づけなくて、声もかけられなくて、恋しくて、切ない。

ちーちゃんが、好きだ。こんなにも好きなのに、こんなに見つめているのに、どうしてちーちゃんは振り向いてくれないんだろう。

さつきから見ているのに、ちーちゃんは気づいてもくれない。ちーちゃんは、酷い人だ。

あんなに可愛くて、可憐で、信じられなくらい愛おしい。ちーちゃんが素敵すぎて、私の恋心は爆発寸前で、馬鹿みたいに私を惑わせて振り回す。

「そんなこと言っているのかなあ？　先週ノート写させてやった恩

を返してくれるんじゃないの？」

「……今度奢るくらいの意味だったんだけど……はいはい。わかったよ」

「またいつでも写させてあげるからねー」

「もう頼まないよ。もう、大丈夫だから」

ちーちゃん……こっち向いて。

私は隠れて気づかれないようにしてるくせに、そんなことを願った。

授業が始まって、いつもならちーちゃんの熱い視線を感じるのに今日は感じない。というか、今まで感じていた視線は全て妄想だった気がしてきた。

うわあああああ………はああ。それが本当だったらマジ凹む。ありえないレベルで凹む。

私はため息をついてから、憂鬱を振り払うため授業に集中することにした。

「ちーちゃん」

休み時間になる度に、隆美さんがちーちゃんを呼ぶ声が聞こえた。いつものことだ。昼休みと放課後は二人にしてくれているけど、休み時間は普通に二人は話をしてる。

多少嫉妬はするけど私としても友人と思っているので問題はない。問題は…ない、けど、うらやましい。

今、私は話かけられないから、うらやましくて仕方ない。

私も呼びたい。ねえちーちゃん。ちーちゃん。ちーちゃん聞いて。ちーちゃん、私を見て。ちーちゃん、気づいて。

ねえちーちゃん、私のこと、どう思ってるの？

昼休みになった。いつもなら、ご飯食べよって言って、ちーちゃんの隣に座ってる。

だけどやっぱり、拒否されるのが恐くて、そんなことはできない。

でも、今日は一日ちーちゃんを避ける、と言う訳にもいかない。昨日借りた制服、洗ってアイロンをかけてちゃんとして持ってきた。返さなきゃ。

もしちーちゃんが私を拒否るなら、これが声をかけられる最後のチャンスかも知れない。他に用事がタイミングよくできるとは思えない。

そう思うと、なかなか踏ん切りがつかない。挨拶すら躊躇った私  
が、そんな簡単に勇気が出せるはずなくて、昼休みは隣の席の子たちとご飯を食べて終わった。

放課後になった。

今しかない。振り向いて、ちーちゃんの席へ行かなきゃ。部活へ行ってしまうたら、余計ハードルが高くなってしまう。

振り向く、振り向く。立って、荷物持って、振り向く。

「涼子さん」

「あ…た、隆美さん。何か？」

「何か、じゃない。ちーちゃん行っちゃったよ？ てかお昼もちーちゃん誘わないし。喧嘩でもした？」

「あ、あ…まあ、そんなところよ」

「何したか知らないけど、謝ったら許してくれるわよ、多分」

「…何で私が悪いこと前提なのか、聞いてもいいかしら？」

「え？ 何となく」

「……」

「とりあえず部活行ったら？」

「…わかってるわよ」

私は立ち上がり、荷物を持って教室を出た。

足が重い。さっきも結局、勇気が出なかった。

つい先週なら、私は何も考えずに声をかけられた。当たり前みたいに近づいて、ちーちゃんを見つめられた。

なのに今は、ちーちゃんを見ることも、ちーちゃんの視界に入ることすら恐ろしい。

こんなに自分が弱いなんて知らなかった。好きな人に臆病でびびって、声もかけられないなんて、自分のことなのに信じられなくて

驚いてしまう。

意味もなく足音も立てないよう、気づかれないよう歩いて、私は部室の前までたどり着いた。

中にはちーちゃんがいる。ドアを開けて、まずなんて言う？ 朝から挨拶もしてないから挨拶から？ こんにちわ？

ちーちゃんが、嫌な顔したらどうしよう。

がっとう勢いよく開けて、驚いてる隙に置いてお礼だけ言って帰るうか？ いや、メールの意味についてちゃんと話さなきゃ。全然納得できない。これが最後のチャンスなんだから、ちゃんと、話さなきゃ。

何を言おうかはまだ決めあぐねていたけれど、とりあえず ドアノブに手を伸ばした。

アドリブで大丈夫だ。口先には自信があるし、今までだって私は本番に強かった。

そう自分を鼓舞したけど手は震えていて、ドアノブに触れる前で止めてしまった。

「……」

どうしても、ちーちゃんの嫌そうな顔しか想像できない。

いやそもそも、ちーちゃんは私に眉をよせた嫌そうな顔や困った顔ばかり向けていなかったか。全て無理矢理な過大解釈でいいように思っていただけで、ついに我慢の限界がきたんじゃないか。

私を嫌いで嫌いで仕方ないんじゃないか。

一度そう考えてしまえば、もう私はいいように解釈できない。

ドアを開ける？ ちーちゃんと会う？ そんなの、無理に決まっている。

私は制服の入った袋をドアの前に置いて、そっと踵を返した。度胸のないヘタレな自分が嫌になる。

何だか泣けてきて、私は適当な空き教室に入って一人泣いた。そしてしばらく泣いてから、馬鹿らしくなってやめた。だってあまりにあまりに、私らしくないだろう。

自分のふがいなさも無力さも、自分でなんとかするべきことだ。泣いてうじうじして解決されることではない。

まだ、今すぐちーちゃんを尋ねるほどには勇氣はでないけど、明日は頑張ろうと思った。

なんだ、泣いたことにも少しは意味があつたのか。こんなことから、これからは泣きたい時には素直に泣くのも悪くない。

私は自分に苦笑しながら、ふと窓の外を見た。

するとおかしなことにちーちゃんが校舎から出ていくのが見えた。何か用事でもできたのだろうか。

ふと、振り向かないかな、と思った。

振り向いたら、今すぐ追い掛けよう。そして想いを伝えて確かめる。

振り向いて。

振り向いて。

振り向いて振り向いて振り向いて。

振り向けっ！

「……振り向くわけないか」

運頼みにするのはやめよう。

「明日から頑張ろう」

呟きながら立ち上がり、そういえばと思い出す。

明日から頑張ろう、なんてことを言ったのは初めてだ。明日やるべきことは明日やろう。となるけれど、後回しにしたのは初めてだ。

ちーちゃんは簡単に私の初めてを奪っていく。ちーちゃんには本当敵わないな、とってから、初めてを奪うだなんてなんだかエッチだと思ってしまって一人にやけながら帰路についた。

## 困惑

りょうちゃんから、謝罪のメールが来た。端的で、それだけに本気で謝っているのだと感じた。

それが余計に、申し訳ない。りょうちゃんは悪くないのに、りょうちゃんに意味もなく八つ当たりをしてしまう自分が嫌だ。辛い。もう友達なんて無理だ。距離を置くなんて悠長なことを言ってもらえない。

『やっぱり友達は無理』

だから私も短くメールを返した。

どんな返事が来るのか、いつそ電話してくるかも知れない。そう思うと緊張して、どう言おうどう言おう、と考えてもよくわからない。

考えて考えて拒否したはずなのに、いつそやっぱりなしと先に謝ろうかという気にさうなってきた。

「……………」

携帯電話を手につだうだしていた私だけど、しばらくして、日は沈んだのにメールも電話もきていないことに気がついた。

「……………もう、こんな時間か」

きつと、返事はないんだ。

いくら優しいりょうちゃんでも、いやむしろ優しいからこそ、あれだけ優しくされながらも拒否する自己中な私に傷ついたらどう。それに優しいからこそ、私の申し入れを受けて返事をしないという

場合もある。

どちらにせよ、もうこれで終わりだ。りょうちゃんのお試し友達は終わり。私はもう、彼女に煩わされたり惑わされずにすむ。

自分が望んだ展開だ。これでいい。問題ない。間違いない。間違いなんかじゃない。

これで正しいんだ。だから、もうりょうちゃんと会わないと思うと胸が痛いなんて、そんなはずない。こんなのは気のせいだ。

「…ばいばい」

携帯電話に向かって独り言を言いながら、私は携帯電話のメモリーから『りょうちゃん』を消した。

少しだけ指が震えたのは、気のせいだ。

月曜日、学校に行く。私は今まで、学校に行きたくないと思ったことはあんまりない。だけど今日は行きたくないなと思った。

りょうちゃんの顔を見てしまうのが嫌だった。もし見て、友達でなくなったのにまだ私が反応してしまうならなんの意味もない。

ただただりょうちゃんを傷つけただけだ。それは最悪だ。それに友達をやめると言ってもクラスメイトだし顔が合えば挨拶くらいするべきだし。

「はあ……」

無理をすれば休めないことはない。両親は共働きだから、朝さえ具合が悪いふりをすればいい。

だけどそうしてずる休みをしても、ぼーっとがんこちゃんを見てたりすると猛烈に罪悪感が湧いてきてしまっただけで落ち着かなくなるから、学校に行った方がマシなのだ。

何だか暗いけど体調悪いなら休んだら？という母の誘惑を蹴り、私は家を出た。りょうちゃんに会いたくなくていつもより一本早いバスに乗った。

バスに乗ると隆美ちゃんと会った。隆美ちゃんはランダムに家を出るらしくたまに会ったり会わなかったりだ。今日はこの時間だったのか。

隆美ちゃんと話していると憂鬱な気持ちも少し和らいだ。

教室に入るとまだりょうちゃんはいない。当たり前だ、と思いつながらりょうちゃんの席を無意識にチェックしていたことに驚いた。そりゃあ、りょうちゃんの反応は気になるが、気にしすぎだ。これからは関係ないんだから、嫌われたって知るものか。

席につきながらそう結論付け、そういえばもう嫌われてるかも知れないのかと気づいた。

それは…嫌だな。

わがままで酷く自己中だ。あれだけ勝手なことをして距離を置くくせに人に嫌われたくないなんて、我ながら吐き気がするほど最低だ。

自己嫌悪でため息をつきながら隆美ちゃんにノートを見せたりしていると、いつの間にか視界の端にりょうちゃんの背中が見えた。

りょうちゃんは姿勢がいいから、とても目立つ。別に他の子の姿勢が悪いわけではないし、りょうちゃんの頭の位置が飛び抜けて高い訳でもないけど、目立つ。

だからついつい、そちらに意識をとられてしまう。

いつもなら鐘がなるまで私の隣に来ていたりりょうちゃんは着席し、私に背を向けている。斜めだから、本を読んでいるのが見える。

私が薦めた本かどうかまではわからない。彼女はブックカバーをつける派だから。

「出席をとります。青井さん」

「はい」

朝のHRが始まり、先生に呼ばれてりょうちゃんが返事をする。落ち着いた声は普段通りで、私は彼女を傷つけてないし、そうだとして今日にひきずるほどでもないとわかってほっとした。

だけど同時に悔しくもあった。私はこんなに気にしているのに。りょうちゃんを気にかけているのに。

私を好きだと、気に入っていると言いながら、私と友達をやめても平気なんだ。

自分勝手も過ぎるのはわかってる。

自分で勝手にやめて、傷つかなければいいと思っていて、矛盾してる。わかっている。ここのとこずつと矛盾だらけだ。

けどどうしようがないじゃない。感情は理性ではどうにもならない。抑えたり我慢はできても、感じないようにはできない。

「武川さん」

「はい」

私は平静を装えただろうか。自信はない。

お昼休みもりょうちゃんは私を誘いにはこなかった。わかってる。当たり前だ。

それでも何度かりょうちゃんを見てしまう。もし振り向いたら、挨拶をしようと思っていただけ、りょうちゃんは振り向かなかった。放課後になって、りょうちゃんは立ち上がるうとしない。部活もきつとやめるのだろう。

「っ」

このままここにいと、変なことを考えてしまいそうで、私は足早に部室へと向かった。

部室について鞆を置き、窓を開けて、そういえば…もう窓を開ける必要がないのだと気づいた。りょうちゃんはいないのだから、空気の換気は必要ない。

窓を閉めて、コーヒーを入れる。

「……馬鹿か」

やってしまった。何故二つもいれるのか。だいたい、りょうちゃん  
んの分をいれたのは一回だけだって言うのに何故間違つたのか。

思わず額に手をあてた。こんなミスをするなんて、変だ。確かに  
今日は一日いらいらしたりぼーっとしたりして、平常心とは言い難  
いけど。

それにしたって、これじゃまるでりょうちゃんに部屋にいてほし  
いみたいだ。

「……………」

…そんな馬鹿な。考えすぎだ。

私はコーヒーを一杯その場で飲み干し、もう一杯を持って席につ  
いて本をひろげた。

「……………はあ」

りょうちゃんはいないのに、向かいの席が気になってしまつ。視  
線をやっても何も無いのに、見てしまつ。そしてその度に誰もいな  
いことに、がっかりする。

「……………え？」

がっかり？ がっかりってどういうことよ。

まるでりょうちゃんがいなくて寂しいみたい。これじゃまるで、  
りょうちゃんに側にいてほしいみたいじゃない。

「……………」

何故か、急に体温が上がった。怒りからくる熱なのか、戸惑いか、

私には判別がつかなかった。

りょうちゃん…今、何をしているのだろう。家に帰ってしまったんだろうな。

って、何でりょうちゃんのことなんか……もう関係ないのに。

関係ない、と考えた途端、胸がいたくなった。なんだ、これ。本を置いて、胸に手をあててじっとりょうちゃんがいつも座る席を見つめる。

目を閉じると、りょうちゃんが本を読む姿が浮かんできた。

「……」

目を開けて、りょうちゃんはいない。

…寂しい、と思った。思ってしまった。あれだけ嫌いだと言って勝手に突き放したくせに。

私は……もしかすると、りょうちゃんを嫌いなわけではないのかも知れない。

だって今、りょうちゃんのことをこんなに考えてるけどドキドキしないし息苦しくもない。ただ寂しくて、悲しい。

まだ出会って一ヶ月もたってないのに、りょうちゃんがいなくて寂しいなんて、彼女を好きとしか思えない。

だけどそれじゃ、苦しくなる理由がつかない。

『見るだけで苦しいとか…それって、世間一般的に、恋って言わないかしら?』

ふいにりょうちゃんの手紙が思い返された。

…いや、そんな…だって、女の子同士なのに？

あの時は違うと即答できたのに、今はできなくなった。

無意識に口にたまっていた唾を飲み込む。熱い。なんだこれ。もう秋も深まっているのに、どうしてこんなに…。

恋？ そんな…：わからない。そもそも、私、恋したことないし。でも本だともっとこう、違う感じだった気がする。

「……」

…：わかんない。今までずっと嫌いだと思ってたし。

ずっと嫌いの反応のままだ。それでもりょうちゃんがいないのは…：嫌だな。

私が本当はりょうちゃんをどう思っているのかは、わからない。

一緒にいると恐いとすら思う。だけど、一緒にいないのは嫌だ。寂しい。一緒にいたい。

決めた。

明日、謝ろう。そして、ちゃんと確かめよう。この気持ちが何なのかわかるまで、もう一度だけ友達（仮）を頑張ろう。

「……」

少しだけ気持ちがすっきりしたのはいいけど、やっぱりりょうちゃんがいないと落ち着かない。

もう今日は部活をやめて、帰ろう。無理に読んだって意味はない。

「ん？」

部室のドアを開けると、すぐ前に紙袋があった。

「…あ」

落とし物かと拾って中を見ると、制服が入っていた。もしかと思  
い上着のタグを見ると、私の名前があった。

「……」

りょうちゃん、返しにきたんだ。なのに私と顔もあわず、声も  
かけずに帰ってしまった。

泣きたくなった。友達をやめると言った。言ったけど、なにもこ  
んな、全く顔もあわない他人みたいになくたっていいじゃない。  
そんなに、怒っているのだろうか。もしかしてもう私のことを嫌  
いになったのだろうか。許してくれないかも知れない。

私は紙袋を持って、憂鬱な気分のまま家に帰った。

「はあ」

貸していた制服をハンガーにかけたところで面倒になって、私はセーターも着たままベッドに転がった。

天井を意味もなく見つめてから寝返りをうつ。

ブレザーが目につく。そういえば去年の冬は結局着なかったし、入学してすぐしかブレザー着てないや。

今年は着ようかな。りょうちゃんは似合っていた。大人っぽくて何だか格好よかった。

……着てみようかな。去年はちよつと大きかったけど、身長も3cm伸びたし。

私は足をあげて反動で起き上がり、ブレザーの元へ。腕を通し、鏡の前に。

「……」

うん、まあ……ぱつと着た感じでわかってたけどね。腕を降ろすると手の甲も殆ど隠れちゃってるし。

そんなにりょうちゃんと身長違うかな？ 私が撫で肩気味なのも原因？

「……ん？」

そういえば、これりょうちゃんが着てたよね……う、うわ、なんか急に恥ずかしくなってきた。

シャツはアイロンまでかけてあったけど、ブレザーは洗えないし……な、なんでこんな意識してんのよ。私馬鹿じゃないの？

だいたい自分のだし？ こんな全然普通だし？

「……すん」

衿を引っ張ってちょっと匂いを嗅いでみた。

「…レモン？」

僅かにレモンの匂いがした。おかしいな。りょうちゃんからレモンの匂いってしたっけ？ ……あ、ファブリーズか何かでレモン系かけたのかな。

「…いい匂い」

私、あんまり消臭剤はトイレ臭くなるから使ってないけど、これは好きかも。

「………はっ」

ってなんで嗅いだ私！？ 人が着てた服を嗅ぐとか変態か！ 匂いフェチか！

「…脱ぐ」

はぁ…なにやってるんだろ。ますます自分がわからないよ。

…明日、仲直りできるかなあ。



## 停止

「りよ、りようちゃん、おはよう…っ」

「へっ…え？ お、おはよう？ あれ？」

どのタイミングで声をかけるのがいいか、やっぱり逃げられないよう放課後に部室がいいか、なんて考えていると、ちーちゃんから声をかけられた。

昨日はあえてバスを早くしたらちーちゃんもいるし、今日はいつも通りにして不意にちーちゃんと会うのを防いだのに、何故いるし。

慌てながら挨拶を返すと、ちーちゃんは頬を赤くしながら私の隣に来て、黙って吊り革に手を伸ばした。

ちよつと俯いた横顔が可愛くて、夢でも見ているのかと思つてこっそり手の甲をつねった。痛い。

「……あの、ちーちゃん」

やばい。ちよつと一日距離開けただけなのに、隣にちーちゃんが  
いるっただけで嬉しすぎてドキドキしてやばい。

「ごめん」

「え？」

「土曜、ごめん」

「い、いいのよ、別に」

ちーちゃんは照れているのか気まずく思っているのか、こっちを見ようとせずに口をつむんでいる。

それが拗ねた子供みたいで、可愛い。ちーちゃん以外ならそれが

謝る態度がよって腹立つレベルだけど、ちーちゃんだし許す。

唐突で意味わからないし、何が彼女を心変わりさせたのかはわからない。謝ったってことは、少なくとも私とまた友達（仮）をするつもりなんだ。

つまり私を嫌いじゃない！ ていうか私を好きなんだ！ 違いない！ いやったあああああ！ 私は間違ってたなかつた！

く、くふふふふふふふふふ。今度こそ、気をつけてちゃんとちーちゃんに私を好きって気づかせる！ 燃えてきた！

さて、まずはどう声をかけるか。

こっちからぐいぐい行くと逃げられる可能性がある。押しに弱いちーちゃんは押され過ぎると逃げてしまうというのは学習したので、前回の二の舞になるつもりはない。

とりあえずちーちゃんが落ち着いて、話かけてきてくれるからかな。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

あの…もしもーし？ ……まあ、いいか。可愛いからしばらく眺めておこう。このままのテンションでまた変なこと言ったら嫌だし。

「……………」

あー、にしてもちーちゃん本当に可愛いなー。

ちょっとバス揺れたらちーちゃんの肩にぶつかりそうな距離だ。

ほんのりぬくもりまで感じそうなほど近い。気のせいだけど。

ちーちゃんのふっくらした頬や、柔らかな髪の毛の真ん中にあるつむじが見える。ほお擦りしたい。髪の毛触りたい。きつといい匂いがするんだろつなあ。

くるつとした髪を指に絡ませてくるくるとしたい。頭撫でたい。でも我慢だ我慢。頬つぺた指でつつきたいなあ。

そこまで考えてふと気づいた。ちーちゃんはこんな風には思わないのかな。もし私みたいに触りたいとか考えたら、好きなんだってすぐにわかりそうなものだ。

気づかないどころか、嫌い勘違いするなんて、どついう理屈だろつ。

…ちーちゃん、ねえ、私のこと……好き、よね？ 気づいてないだけよね？ ねえ……私は、好きよ。だから早く、気づいて。

何だか、ちーちゃんが関わると私は情緒不安定になる。自信もすぐ崩落してしまう。さつき有頂天になったのに、すでに不安になつてしまつてる。

どつしたらちーちゃんは気づいてくれるんだろつ。どつしたら、私を好きになつてくれるんだろつ。全然わかんない。なんでさつきは自信満々だったのかしら。

私は気づかれないようたため息をついた。

ちーちゃんが話かけてきてくれたら、全力で会話しよう。

と思つて待ち構えているのに、ちーちゃんは謝つたつきり声も出さず、私を見ようともしない。

「じゃ……」

「ま、また後で」

結局ちーちゃんは教室に着くまで何も言わず、ドアをくぐつて別れた。

「おはよう」

「おはよう、涼子さん」

隣の席の子に挨拶しながら一番前の席に座る。

「今日是一緒だね。仲直りしたの？」

「ええ…まあ、多分」

「曖昧ー。でもよかつたね」

「ありがとう」

返事をしながらも、仲直りしたのか自信がなくなってきた。だつて、あれきりちーちゃん何も言わないし。

何となく気まずいから謝っただけで、もしかして元の関係に戻るつもりはないとか？ ……ありうる気がしてきた。ちーちゃんだし。

あー、どうしよう。ほんと、どうやったらちーちゃんを攻略できるのか誰か教えてほしい。

ぐだぐだ思考のまま授業に突入したので、気を紛らわせるために勉強をする。勉強をしているとちよっと楽だ。何も考えなくて済む。

授業が終わってから、ちーちゃんが話かけてくれなきゃ私からは言えない。逃げられたら困るし、何より、まだ少し、勇気がでない。

授業合間の休み時間にはちーちゃんは来てくれなかった。だから私はちーちゃんの方を見ることすらできない。

「りょうちゃん」

「え、あ…」

お昼休みになって、ちーちゃんがやってきた。お弁当持ってる。

「いい？」

「ど、どうぞ？」

「智佳子さん、私向こう行くから私の椅子使って」

「あ、ありがとう」

「なんのなんの。はい、涼子さんの向かいね」

「う、うん」

隣の子のナイスアシストによりちーちゃんは私と膝がぶつかりそうな近距離で向かい合う。

私の机にちーちゃんは可愛らしいいつも使ってるパンダのかかれたお弁当袋を置く。

「いただきます」

「い、いただきます」

私も慌ててお弁当を鞆から出し、手を合わせて開けた。

「……」

もくもくと食べたすちーちゃん。睫毛がぱちぱち瞬きに合わせて揺れていて、リスがご飯を食べるようにはくぱくと多めに口に入れて頬を膨らますちーちゃん。

私も食べながらじっと見つめていると、はっと気づいたように一瞬だけ私を見て、耳まで真っ赤にしてお弁当に視線を戻した。

「……」

それでもまだ黙々と話さずに、お弁当を食べている。何を考えているんだろう。

「…ん、ごちそうさま」

食べ終わったちーちゃんはお弁当に蓋をし、箸箱も一緒にして袋に入れて紐を結んで手を膝に下ろし、俯き気味に上目遣いでじっと私を見た。

「な…なにかしら？」

「食べないの？」

「た、食べます」

促されるまま食べる。ちーちゃんはさっきとは打って変わりじっと私を見ていて、食べにくいことこの上ない。

お弁当に視線を降ろして口に運んで、ちらっとちーちゃんを見る。ちーちゃんは私をガン見してる。

1、2…

駄目だっ。気恥ずかしくって3秒以上見つめ返せない！ だってこんなに真っ正面からちーちゃんを合わせるなんて初めてなんだもの！

うう、ちーちゃんやっぱ可愛すぎ！ 真っ正面からでもプリチーとか！ とかね！ もうね！ 可愛いわ！

「……………」

こんなに可愛いちーちゃんを、ずっと見つめることすらできないなんて、私はなんて意気地無しなんだろう。でも、だって、仕方ないじゃない。

近くにちーちゃんがいて、私を見つめているというだけで、ドキドキして言葉も出せられないんだから。

ちーちゃんがよそ見をしていた時は、こっちを見てほしくていくらでも話し掛けられたのに、ちーちゃんが自分からずっと私を見ているのは初めてで、どうしたらいいのかわからない。

「……………」

結局、私たちはろくに会話もせずに昼食を終えた。

放課後になると、ちーちゃんが誘いにきてくれた。

「部活…行く？」

伺つようなちーちゃんの遠慮がちな態度が可愛らしく、私は一も二もなく頷いた。

「ええ、ちーちゃんがいいなら是非」

ちーちゃんはほっとしたように唇を緩めて、それからきゅっと引き締めた。

「話、あるから」

「ん？ うん？ わかったわ」

何かしら。………だ、大丈夫よね。悪いことじゃないわよね？  
改めてお友達…ってことよね？

私はちよっぴり戦々恐々としながらも無言のちーちゃんについて、黙って部室に向かった。

昨日開けれなかったドアはちーちゃんが開けてくれて、私はたった一日来なかったただけなのに懐かしい気さえした。

「座って、入れるから」

「あ、ありがとう」

ちーちゃんがコーヒーを入れてくれて、私は先に席についた。渡

された私のカップを受け取り一口。

とても甘い。ちーちゃん用の味付けだ。最初に飲んだ時は甘すぎて、少し嫌になったのに、何故か今は胸が暖かくなった。甘味はちーちゃんの味だ。ちーちゃんのように甘い。

お砂糖のように甘いちーちゃんが好きな甘いコーヒーは、私をとっても安心させた。

「りょうちゃん」

「なにかしら？」

向かいに座った彼女はコーヒーを一口飲むと、真剣な顔を私に向けた。私は何だか照れ臭くて少し俯いてしまうのだけれど、よそ見をするのも不誠実なので頑張ってちーちゃんを見返した。

「…ちよつと、隣いい？」

「え？ 隣って？」

「だから、隣、座っていい？」

「へ……いい、いい、けど？」

どうしたというのだろう。今日のちーちゃんは嫌に積極的だ。言葉は少ないけど私を見つめてあげくに自分から距離を詰めるなんて、今まででは考えられない。

隣の椅子にクッションまで持つてきて、ちーちゃんは椅子を私のにびったりくつつけて座った。

当然、私とちーちゃんの体の側面もびったりくつついている。暖かいついていうかむしろ熱いくらいで、脳みそが沸騰しそう。

ていうかいきなり密着とかどういう状態よ！？ 服越しなのに柔らかないし髪の毛からいい匂いするしちようドキドキしてあああああながどうしてこうなったか知らないけど夢みたい！ あああ鼻息荒いと思われてないかとか不安になるのに息が荒くなるのとめら

れないし発汗とまらないしヤバい！

「りょうちゃん」

ちーちゃんは俯き気味で、前髪の隙間から鼻先が見えるくらいだけど、耳と首筋が真っ赤で、見なくてもどんな顔かはわかった。

ここに来るまでの不安なんてもはや微塵もない。ちーちゃんは私を好きだ。私の妄想なんかじゃない。事実だ。これ以上ない真実だ。ちーちゃんは私が大好きなんだ。

「……」

何か言わなきゃならない。そうだ、告白するなら今だ。今こそ面目躍如だ。と思うのに、私の口は中途半端に『い行』の口のまま固まってしまって、『ちーちゃん』という呼びかけすら出てこない。

「あの、さ…変なこと聞いていい？」

「も、もちろん。何でも聞いて？」

やや裏声になってしまったが、ちーちゃんは怪しまなかつたらしく顔をあげ真っ赤な顔を隠さず、まっすぐ私を見た。

なんて美しいんだろう。決意を秘めたような凛々しい眼差しも、力強い眉も、一文字に引かれた唇も、美しい。可愛い彼女の真剣な顔は、こんなにも素敵で綺麗なものだったのか。

また新たな一面を知って、私はますます彼女にのぼせ上がってしまふ。ああ、彼女が好き。ちーちゃんが好きで好きで、好きだ。

「私のこと好き？」

「大好き……え？」

素で答えてから質問の意味を理解して、その突飛さに驚いてちーちゃんをまじまじと見る。

ちーちゃんはにこーと笑った。

可愛いッ!!

初めて向けられたちーちゃんの屈託ない満面の笑顔に思わず思考停止して見とれた。

ちーちゃんの可愛さは留まることを知らず、私はもはや何も言うことができず、動くこともできなかった。

## 自覚

「おはよう…っ」

いつものバスで見かけ、思い切って近寄りながら声をかけた。

「お、おはようっ？」

戸惑いつつも挨拶が返ってきたことにほっとしつつ、二日ぶりにかけられたりょうちゃんの声がじんわり胸にしみこんで、喜びが広がる。

よかった。昨日も私を無視しようとしたわけじゃないんだ。ただ私がああ言ったから避けたただけだ。

「……あの、ちーちゃん」

りょうちゃんが私をちらっと見て私を呼ぶ。恐らく私の態度を問い詰めるつもりなのだろう。だけどどうしたのかと聞かれても、明確な答えはまだ出せない。

「ごめん」

「え？」

だから先手をつって謝ることにした。

「土曜、ごめん」

「い、いいのよ、別に」

とりあえず何とか許してもらえた。それにほっとして、だけど何

となくりょうちゃんの視線を感じて恥ずかしくて、私はにやけそうな口元をぎゅっと引き締めた。

りょうちゃんにニヤケ顔は見られたくないし、何より、そうしてなきゃ自制できそうにない。ドキドキしてむずむずして、足踏みしたいような、いっそ走りだしたいような、無性にりょうちゃんの名前を叫びたいような、そんな衝動にかられていて、私は我慢するの  
で精一杯だった。

「……」

りょうちゃんは何も言わない。私も何も言わない。

だけど嫌ではない。ドキドキして少し苦しいのに、どこか甘い。苦しさは甘いつて意味がわからないし、変態みたいだけど、なんだから悪くない。この苦しみが心地好いと、初めて思った。

そのままバス停についた。

私もりょうちゃんも黙ったまま下りて、教室についたら別れた。

りょうちゃんの背中では昨日と同じはずなのに、何故か見ているだけで落ち着いた。昨日のイライラが嘘みたいだ。

「……」

隣の子と何か話をしている。顔を寄せて話をしているからイマイチ聞こえない。

せまい教室だから普通の会話ならちよっと注意を払えばだいたい聞こえるのに。何を話しているのだろう。

少し……かなり、気になった。

休み時間は話し掛けるのは憚られた。だって話題がない。りょうちゃんの近くに行くと、何を話していいのかわからなくなる。

何もキツカケがないから我慢した。りょうちゃんから来てくれな  
いかなとちよっと思っただけど、来てくれなかった。

お昼休みになったから、お昼と一緒に食べるという理由ができた。  
りょうちゃんがまた他の子と食べてしまっ前に誘いに行こう。

「りょうちゃん」

「え、あ…」

「いい？」

顔をあげたりょうちゃんはまだ片付けを終わってなくて驚いていたけど、お弁当袋を持って尋ねると意味を察してくれたらしく頷いた。

隣の子の席を借り、私とりょうちゃんは向かい合って座る。りょうちゃんが片付けた机にお弁当袋を置く。りょうちゃんもお弁当を出したのでタイミングを合わせて開ける。

「いただきます」

「い、いただきます」

とりあえず食べだす。今日のお弁当のご飯にはたまごふりかけ。

これ結構好き。口に含んでから、ちらつとりょうちゃんを見ると私を見てた。

びっくりして気づいてないふりをしてまた視線を下にしたけど、意志に関係なく心臓は早くなり、顔が熱くなる。もしかしたら耳も赤いかも知れない。恥ずかしい。

「……」

りょうちゃんは何も言ってこないから私も何も言わずに、食べてるところ見られるのか、何だか恥ずかしくてちよつと急いで食べた。

「…ん、ごちそうさま」

何とか食べ終わった。お弁当に蓋をし片付けてもまだりょうちゃんは私を見てる。手を膝に下ろして、俯いてしまう。だって、見られてると思うと恥ずかしくて震えるんだもん。

でも頑張って目だけはりょうちゃんを見る。りょうちゃんはお箸が止まってる。

「食べないの？」

「た、食べます」

また食べはじめた。りょうちゃんはまだ半分も減ってない。もしや私を見ていたんじゃないかと感じていたんだろうか。だとしたら自意識過剰すぎ。恥ずかしい。

それにしても、こうやってまじまじと見るとりょうちゃんは綺麗な食べ方をする。いつもとはいえ背筋が伸びているし、指が長いからお箸を持つのがさえ様になっている。

私はちよいちよい猫背になってしまっから、りょうちゃんの前で

は気をつけないとなあ。

もぐもぐ動きりょうちゃんの口元を注視していると、何だかその唇に触りたいと思ってしまった。だけどいきなりそんなことしたら変人確定だ。

とうか嫌いじゃないのに触りたいだなんて………やっぱり、そうなのだろうか？

だとしたら、めちゃくちや恥ずかしい。だって好きなのに嫌いとお勘違いするとかありえないし、嫌いと言ったとはいえりょうちゃんが気になって仕方ないとか本人に言ってしまったし。

ああああ、ちょっと待って。考えたら私めちゃくちやすごいこと言った気がする。

……、はああ。うう恥ずかしい。

もう余計なことは考えずに、りょうちゃん観察に没頭しよう。

りょうちゃんは、俯き気味なので当社比120%で睫毛長く見える。私も睫毛が短いわけじゃないけど、りょうちゃんの睫毛はあんまりカールしてないけど外を向いていてクールな目がより凜としていて、目力が凄い。

でも今は下を向いているから大丈夫……ん？もしかして、私が見返したから照れた？特に真っ赤じゃないけど……んー、考えたら私、りょうちゃんは余裕げに微笑んでる顔しか見たことない。

「……」

今は普通だ。微笑んでない。無表情……でもない？……困惑？……微

妙に照れてないこともない？

……よくわかんない。とりあえず言えることは、相変わらず綺麗な顔ってくらいだ。

本当に、綺麗。キスしたい。

……………ん？ あれ？ 今なんて？

……………うわぁ……………いや、何となく、好意だろうとそろそろ気づいていたけど…私、めちゃくちゃ恥ずかしい奴じゃん。キスしたくなって、ようやく好きって自覚するなんて、ほんとに遅すぎ。鈍すぎ。

「……………」

私は赤面がとまらなくて、ただ黙ってりょうちゃんを見つめ続けた。

放課後、りょうちゃんを部活に誘うと普通に来てくれることになった。お昼も大丈夫だったけど、りょうちゃんは相変わらず無口だったからもしかしたら断れるかもと思わないでもなかったからほっとした。

でもりょうちゃんが断らないとして、私を恋愛感情で好きとは限らない。以前言われた好きがそういう意味とは限らない。むしろ違

う可能性の方が高い。

気を引き締めて、りょうちゃんの気持ちを確かめようと心に決めた。

「座って、入れるから」

部室についてすぐそう言って着席を促す。今日は私がいたい気分だったのだ。

「りょうちゃん」

「なにかしら？」

いつも通り向かいに座り、コーヒーを一口飲んでから、りょうちゃんを真つすぐ見る。りょうちゃんは珍しく顎をひいて上目遣いになっている。

そんなりょうちゃんの珍しい表情にぞくぞくした。

「…ちよつと、隣いい？」

「え？ 隣って？」

「だから、隣、座っていい？」

「へ……いい、いい、けど？」

ちよつと強引に隣に座った。椅子を寄せて寄り添うように座ると、りょうちゃんの体温を感じた。

ドキドキする。でも好きだと自覚してしまえば、ドキドキが気持ちいくらいに感じた。鳥肌も息苦しさも、好きという気持ちがあふれて体のコントロールが効かないのだと今はわかる。

胸が痛いくらい心臓がドキドキしていて、体中が熱い。

「りょうちゃん」

赤い顔が恥ずかしくて俯いたまま声をかけた。りょうちゃんはだ  
けど何も言わない。

どんな顔をしているのだろう。今何を思っているのだろう。私の  
ことどう思っているんだろう

「あの、さ…変なこと聞いていい？」

「も、もちろん。何でも聞いて？」

高い声でりょうちゃんは私を促した。もしかして、りょうちゃん  
も緊張しているのだろうか。

顔をあげると、りょうちゃんも上気した赤みがかった顔をしてい  
て、慌てたように目を見開いて口を僅かに開けている。

私から何らかの雰囲気を感じているのか、それとも私と距離が近  
いからなのか。もし後者なら、とても可愛いなと思った。

「私のこと好き？」

「大好き…え？」

まだ嫌いになってないか、という意味で聞いたのだけど、答えて  
からほかんとした表情を浮かべたりりょうちゃんがあんまりに可愛く  
て、嬉しくて頬が緩むのが押さえられない。

りょうちゃんが好きだ。大好き。もう我慢できない。りょうちゃ  
んの感情を確かめるなんてまどろっこしい。先に私の気持ちを伝え  
よう。

「んっ」

好き、と言おうとしたんだけど、気づいたらキスをしていた。

腰を浮かして、りょうちゃんの肩に手を置いてりょうちゃんの唇に自分の唇を押し付けていた。

唇は柔らかくて、気持ち良くてもう他に何も考えられなかった。

こんなに素晴らしいものが世にあるとは思わなかった。気持ちいい。

心臓はこれ以上ないくらいドキドキしていたし、全身が緊張で僅かに震え、目眩がしそうなくらいりょうちゃんの姿が輝いて見えたけど、嫌いだとはもはや間違いないようがない。

だってキスをする今、めちゃくちゃ気持ち良くて、幸せを感じているんだもん。

「は…ち、ちちちちーちゃん!？」

唇を離すと混乱したように真っ赤になったりょうちゃんが目を白黒させた。

「ちー、っ」

急にごめんね、好きなの。と言おうとしたのにまたキスしていた。

「…な、なんなのよう」

キスをやめると、ちーちゃんは真っ赤な顔で涙ぐんでいた。それが可愛くてドキドキした。

「キス…したくなかったの。嫌？」

ストレートに言うてみた。なんとなく、りょうちゃんにはこの方がいい気がした。

「い…いやじゃ、ないけど…でもあの、二つ、順番ってあるじゃない？」

「りょうちゃん、私…これからもずっと、りょうちゃんとキスしたい。たくさんキスしたい」

耳まで真っ赤になったりょうちゃんは言葉を失ったように、口を二、三度開けたり閉めたりしている。

「ねえ、キスしていい？」

「……………」

りょうちゃんは黙ったまま頷いた。

そつとキスをした。三回目でも、幸福感は全く衰えない。

「ね、ねえちーちゃん」

「なに？」

「その…私はちーちゃんが好きよ。ちーちゃんも、言って？」

キスした。四回目。

「わからない？」

「わかるけど……………そうじゃなくて」

キスした。五回目。

本当は、好きって言おうしてる。してるんだけど、言葉を発音する前に体が動いてキスしてしまう。

好き、と言おうと口を開くと気持ちが溢れてキスせずにはいられ

ない。

「ん、ち、ちーちゃあん」

「りょうちゃん、可愛い」

「……ばか。こんなに強引な子だと思わなかったわ」

「嫌いになった？」

「……好き。ねえ、ちゃんと口で言ってる？」

『大好き』

六回目。

気持ちをこめてキスをしてから、私はぎゅっとりょうちゃんを抱きしめた。

「……ずるいわ」

ごめん。でもちょっと待って。気持ちが落ち着いたら、今度こそキスより先に言葉にするから。

謝罪の気持ちもこめて見つめると、りょうちゃんは目を閉じた。  
七回目。



## 自覚（後書き）

最初はこの話で終わりにしようと思いましたが、視点的に偏るの  
であと一話続きます。

蛇足的で短くなるかも知れません。

## 終幕

ちーちゃんにキスされてしまった。しかも好きって言われてない。恋人になっちゃった。でも好きって言われてない。

急展開すぎる何これ。頭がついていけなくて脳みそパンクした。

しかもどういうわけか手を繋いで一緒に帰ってるし。ちーちゃんの手え柔らかい！とか考えてる場合じゃない！

たかが一時間と少しで数えられないくらいキスしてしまった。

まだ唇にはキスの余韻が残ってる。気持ちよかった。いい匂いした。

心臓ばくばくして死ぬかと思った。ていうか途中から夢じゃないかとすら疑ったけど現実だった。まさに事実は小説より奇なり。

「りょうちゃん」

「なあに？」

「…えへへ、何でもない」

つまり呼んだだけなのね。あーもー可愛いっ！可愛すぎるっ！

さつきは不覚をとってキスされまくって押されっぱなしでこのまま最後までされてしまうのかと思ったけれど、そんなことはなくて普通にキスだけだった。

後半唾は飲まされたけど、まだだ。つまりここから私が盛り返せば今後の関係において私がリードする立場になれる、はず。

いや、ちーちゃんなら確かにされるのも悪くないとかさされてる時は思ったけど、本来私って押し倒す側だし。纯粹無垢なちーちゃんに手取り足取り教えてあげたい。

「りょうちゃん、ちょっとちょっと」  
「ん？　どうかした？」

ちーちゃんが私を引っ張って行くので素直に道の端に寄る。元々狭い道なのにどうしたのだろう。

「りょうちゃん、ん」

「んっ」

「えへへ、びつくりした？」

「…びつくりしたわ」

大胆にも道端でキスされてしまった。電信柱の横に来て隠れたつもりか。他に通行人いないけど。

「行こっ」

また歩きだす。

軽く背伸びしてキスして来たちーちゃんを思い出すだけで鼻血出そう。なんでこんなに無防備にキスしてくるんだ。

ただのキスなのに私の頭の中を占領しちゃうなんてさすがちーちゃん、と言いたいけどこれじゃダメだ。

「……いや、ダメでもないかも？　キスだけで幸せだし、しばらく慣れるまでキスだけの純情カップルも悪くないかも？」

「……………」

こうやって手を繋いでると触りたい願望が出てくるけど、きゅっと力をいれて握られるだけでテンションというか快樂というか幸福値？が最高頂になって、満足してしまう。

キスさえしなくてもにやけてしまうのに、キスはこれでもかとしてくれてキャパシティオーバーしちゃうレベル。

このままではちーちゃんに主導権を握られてしまう。

「ちーちゃん」

「なにー？」

「…なんでもない」

……ちーちゃん可愛いし、幸せだしまあしばらくはいいか。

「ちーちゃん？」

「……」

バス停についても動かないちーちゃんに疑問形で話し掛けると、黙って私の手を強く握ってきた。しばらくしてバスは発車した。

「今から、お邪魔していい？」

「それはまあ、いいけど……」

「よかった」

にこっと笑うちーちゃんに微笑み返す。家に来ること自体は大歓迎だ。

でもずいぶん唐突だ。今思い付いたのだろうか。あ、わかった。きつとバスを下りるとなった段階で私と離れがたくなったのだろうか。ちーちゃんは可愛いなあ。

というところで、連れてきた。

「りょうちゃん家、マンションなんだ。なんか凄いね」

「変なことというのね。一軒家の方がいいんじゃないの？」

「マンションの方が高いよ」

「高いの好き？」

「うん」

「ならよかった。うち、最上階だから」

もし高所が苦手ならちよつと困ることになるところだった。部屋はカーテン閉めればいいとして、エレベーターにも大きめの窓がついているのよね。このあたりでは一番高いから苦手な人はびびっちゃうかも知れないとちよつと心配だったのだ。

「〴〵両親は？」

「父は単身赴任。母は普通に仕事だから、誰もいないわ」

「りょうちゃんがいるから十分だよ」

「…ありがとう」

そう返されるとは。

ともかくちーちゃんを連れて帰宅。

「あれ、ただいまって言わないの？」

「誰もいないし」

「私がいるよ」

「…ただいま？」

「お帰りなさい。お邪魔します」

ちよつと意味がわからないけど新婚さんごっこみたいだしよしとする。

部屋に連れて行くと少し驚かれた。確かにちーちゃんの部屋より大きい。単に私が一番長く家にいるからと一番大きな部屋を与えられただけだ。

「あ、レモンの匂い…」

「嫌い？」

「ううん。りょうちゃんっぽい。部屋の匂いだったんだ…」

「ん？ もしかして私からも匂いしてた」

「あ、うん、まあ」

当然ながら家ではだいたい自室なので、私自身にレモンの匂いが染み付いているのかと思っただが曖昧な返事が帰ってきた。

「飲み物とつてくるから、座ってて」

鞆を勉強会机の横にかけて、興味津々にキョロキョロしてるちーちゃんに苦笑しながら私は部屋を出る。

冷蔵庫を開ける。我が家では母がコーヒーを飲むが、ブラック派なのでミルクがない。私はもっぱら麦茶や番茶だ。ジュース…カルピスの原液まだあるけどあったかい飲み物の方がいいかしら……あ、ココアの粉。これでいいか。

冷蔵庫の隅にあった。そういえば、この前母がもらってきていた。

ココアをいれて、戻る。

ちーちゃんはそわそわしながらベットの座っていた。そういえば、引越す前と違ってまだ誰も招待してないからクッションなんかもしまったままで、ベット以外に座るところがない。丸テーブルも出してないし。

「ごめんなさい。座るところがなかったわね。今クッション出すわね」

ベットの下から折り畳みの丸テーブルを出し、クッションを押し入れから出した。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとう」

お盆に乗せてきたココアを机に置き、ちーちゃんに進める。移動したちーちゃんはそっとカップを手にとった。私も向かいに座る。

「ココアだ。いい匂い」

「好き？」

「うん、好きい」

甘ったるい言い方で『好き』というちーちゃんだ。聞いてるだけででれでれになるけど、まだ私言われてないのに、ココアが先に言われてしまった。

「そんなに好きなら、部室でも飲めばいいのに」

言いながら私も一口。うわ、めちゃくちゃ甘い。そういえ母は一口で捨てていた。元々砂糖入りのやつだから私が失敗したわけじゃ

ない。お母さんほどじゃないけど、あまり甘いものは好きじゃないのよね。

「んー、だってココアが好きって子供っぽくない？」

「そんなことないわよ。可愛いわ」

ちーちゃんがココア好きというのはピッタリで可愛い。だいたい、コーヒーだってあれだけ甘くしてるのだからかわらないだろう。

甘いものが好きというのは女の子らしいし、ちーちゃんに限らず、ココアくらいで子供っぽいとは思わない。

「そう…かな。へへ…じゃあ、今度部屋に置こうかな」

「ああ、なんならうちに余ってるから持って行くわ」

「え、いいの？」

「貰い物で、余ってるから」

一缶だけとは言え、我が家では消費できそうにないしね。

「ありがとう、りょうちゃん」

この笑顔が見れるなら安すぎるくらいだ。

ちーちゃんは可愛いなあ。

「ねえりょうちゃん」

「なに？」

「隣行つていい？」

「もちろん」

ちーちゃんがえへへと可愛く照れ笑いしながら私の隣にくる。

私に近づくだけでほっぺた真っ赤にしちゃって可愛くてたまらな

い。

「キスしていい？」

「え、ええ」

しまった。また先手をとられた、と思ったけどとりあえず顔を寄せた。目を閉じるとちゅ、と軽く唇が合わせられる。

かあと頬が熱を持つのを感じる。ちーちゃんとキスしてる。触れている唇がとろけそうに柔らかくて気持ち良くて、ドキドキする。

「ふふ、りょうちゃん」

唇が離れたから目を開けたら、妖しく笑む真つ赤なちーちゃんの顔がすぐ傍にあった。

「ちーちゃ、んう」

名前を呼ぼうとしたら、またキスされた。しかも舌を入られた。ちよ、お。

「あつ、んう」

ちーちゃんの腕が私の首にまわりつく。

熱い舌。ちーちゃんの唾はココアの味がして甘いのに、もっと欲しいくらいだ。

どろどろと湯煎されたチョコレートのような唾が私の口に流れこむ。ちーちゃんのだと思えば全く嫌悪がない。むしろ、快樂の原液のようでめちゃくちゃ気持ちいい。

「ん、ん、ん、はあ…あ…りょうちゃん」

「く、んう…」  
「じぼさないで、ん」

べろと顎から舐められ、またキスをして舌をいれられた。ぬめぬめしたちーちゃんの舌が私の口内を蹂躪し、私は息つく隙もない。唇を甘噛みされ、歯を隅まで舐められ、私の唾液を吸われ、唾を送られ、私の舌を甘噛みされて吸われて舐められる。

「はっ、はああ、あ…はあ…」

全身が快楽に支配される。ちーちゃんを今すぐ押し倒したい。

「ちー」

「りょうちゃん、好きだよ」

「っ！！？」

体が震えた。至近距離で瞳を合わせて囁くように言われたちーちゃんの一言で、私の毛先から爪先までが痺れるほどの快楽と幸福に満たされる。

初めて、好きと言われた。言われただけで、絶頂を迎えた。今まで感じたことがない強烈なエクスタシイに、私の視界は点滅し、涙まで出た。

「私も…好き」

荒れた息の隙間から言葉を返す。

もう、押し倒したいか思えない。全身がすでに快楽の余韻に痺れていて、何も考えられない。

ただ目の前のちーちゃんを好きでたまらないとだけ感じてる。

「うん、知ってる」

キスをされた。どんどん後からさらにさらにと追加される幸福と  
快楽の嵐に、私は降参する。

今までがどうかなんてもはや関係がない。私とちーちゃんにはこ  
れが適切で最高の関係なのだ。

私は変に抵抗することはやめて、素直にちーちゃんに身を任せた。

## 終幕（後書き）

おしまい。

過剰反応していただけに好きとわかったらもはや歯止めが効かなくなる、という設定。

途中でキャラが変わった気がしないでもない。会話文が少ないから、性格とからしさを表現しきれない気がする。

最後まで読んでくれてありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0207u/>

---

一目惚れ

2011年10月4日06時40分発行